

南あわじ市埋蔵文化財調査報告書 第9集

久保ノカチ遺跡Ⅱ

—経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区第9工区工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

はじめに

兵庫県の最南端に位置する南あわじ市は、古代より一年中を通して温暖な気候と肥沃な大地に恵まれ、その昔、天皇が食を求めた重要な場所とされる「御食国」^{ミケノクニ}と呼ばれた淡路島のなかでも最も農漁業が盛んで、自然豊かな地域です。

今や食料自給率が下がり続ける日本社会において、南あわじ市では170%を超えています（カロリーベース：日本39%、兵庫県16%）。多種多様な野の幸、山の幸、海の幸に恵まれた「御食国」としての南あわじ市の果たす役割は、いにしえよりなお層火きなものとなっていると言えるでしょう。

南あわじ市の将来像である『「食」がはぐくむ ふれあい共生の都市』をめざし、さらなる農業生産性の向上のためには、圃場整備事業は必要不可欠な事業であり、平成に入ってから大規模な圃場整備事業が次々と展開し、それに伴う発掘調査についても激増する事となりました。今回、報告を行う久保ノカチ遺跡の発掘調査もその一例です。

開発事業を推進していく立場と文化財を守っていく立場、この二者は一見相反するように見えますが、次の世代へ誇り得るふるさとを残したいという思いは全く同じであります。今後は、事業の急速な展開に比べ、閉塞感のあった発掘調査成果の公開事業にも力を注いでいかなければなりません。報告書の刊行はその第一歩であり、ふるさと南あわじ市の歴史を知るための基礎資料として大いに活用されることを願っております。

南あわじ市のまちづくりの柱の一つである「人づくり～知恵あふれ、郷土愛が満ちるまちづくり～」をめざし、まだまだ調査結果の公開が不十分な状況ですが、今後も生涯学習・文化振興活動の一環として、郷土の歴史や文化を学ぶための環境づくりを進め、文化財保護の更なる理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

平成26年3月31日

南あわじ市教育委員会

教育長 岡田昌史

例 言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市賀集福井に所在する、久保ノカチ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区第9工区工事）に伴い、兵庫県淡路県民局の依頼を受け、平成19年度に南あわじ市教育委員会が本発掘調査を実施した。
3. 本発掘調査は、南あわじ市教育委員会（南あわじ市埋蔵文化財調査事務所）の山崎裕司が担当した。
4. 発掘調査時の写真撮影は山崎が行った。平面・層序図等の実測作業は山崎の指示を受けて宇治田力・富岡美早子・濱本蒔美が行い、デジタルトレースは宇治田・白川裕二・豊田亜希子が行った。遺構の掘削作業等は、南あわじ市シルバー人材センターに委託した。
5. 出土遺物の整理作業については第1章に記す通りであるが、遺物の実測作業については坂口弘貴・山崎が行い、デジタルトレースは宇治田・白川・豊田が行った。遺物の写真撮影は山崎が行った。
6. 本書の執筆と編集は山崎が行った。
7. 当調査に関わる写真や実測図面等の資料は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所で保管している。
8. 発掘調査にあたり、兵庫県淡路県民局洲本土地改良事務所、兵庫県教育委員会、南あわじ市シルバー人材センターの諸機関から御協力や御指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。
9. 凡例は下に示す通りである。
 - ・本書に記される標高は東京湾平均海水準を基本とする。
 - ・各調査区の平面図の方位は磁北を示す。
 - ・層序図の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究会監修）を参照した。
 - ・遺構番号は調査時、調査区毎に遺構の種類によらず1から通し番号を付したものをそのまま使っており、本書では報告・編集上必要な番号以外は割愛した。遺構は可能な限り柱穴・土坑等の言葉に改めたが、性格の明らかでないものはそのまま遺構とした。復元した建物については1～8、欄列には1～6の番号を付した。
 - ・本書収録の遺物は、ゴシック体で通し番号を付した。
 - ・土器実測図の断面は、土師器が□、輸入・施釉陶磁器が■、瓦器・瓦質土器が■、須恵器・国産陶器が■とした。縮尺は基本的に1/4としたが、大型品（40～45）は1/8とした。
 - ・鉄製品実測図の縮尺は1/2、石製品の縮尺は1/4とした。

本文目次

はじめに

例 言

第1章 調査の経緯と経過 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 3

第2節 歴史的環境 4

第3章 調査成果

第1節 1地区 7

第2節 2地区 8

第3節 3地区 21

第4節 4地区 22

第4章 総 括

第1節 供膳具の分類と時期について 27

第2節 遺構の変遷と時期について 36

第3節 建物群と遺跡の性格について 38

挿 図 目 次

図1 調査区設定図 (S=1/2,000) 2

図2 南あわじ市の位置 3

図3 淡路島南部の地形と調査地の位置 (S=1/4,000) 3

図4 調査地周辺の遺跡 (S=1/25,000) 4・5

図5 1地区の位置 (S=1/5,000) 7

図6 1地区 北壁層序図 (S=1/80) 7

図7 1地区 包含層出土遺物 (S=1/4) 7

図8 1地区 平面図 (S=1/200) 7

図9 2地区の位置 (S=1/5,000) 8

図10 2地区 東壁層序図 (S=1/80) 8

図11 2地区 平面図 (S=1/200) 9

図12 2地区 建物3平面・断面図 (S=1/100) 10

図13 2地区 建物4平面・断面・層序図 (S=1/100) 10

図14 2地区 建物5平面・断面・層序図 (S=1/100) 11

図15 2地区 建物6~8平面・断面図 (S=1/100) 12

図16 2地区 土坑70・71 遺物出土状況平面・断面図
(S=1/20) 13

図17 2地区 遺構出土遺物 (建物、櫛列、溝)
(S=1/4・1/2) 15

図18 2地区 遺構出土遺物 (土坑70・71)
(S=1/8・1/4・1/2) 17

図19 2地区 遺構出土遺物 (その他の遺構)
(S=1/4・1/2) 18

図20 2地区 包含層出土遺物 (S=1/4) 20

図21 3地区の位置 (S=1/5,000) 21

図22 3地区 北東壁層序・平面図 (S=1/50) 21

図23 4地区の位置 (S=1/5,000) 22

図24 4地区 北壁・東壁層序図 (S=1/80) 22

図25	4地区 平河岡 (S=1/200) ……………	23
図26	4地区 建物1・2平面・断面図 (S=1/100) ……	24
図27	4地区 遺構出土遺物 (S=1/4・1/2) ………	25
図28	4地区 包含層出土遺物 (S=1/4・1/2) ……	26
図29	中世の供養具 (S=1/8) ……………	30
図30	土師器皿a類の法量分布……………	32

図31	須恵器皿a類の法量分布……………	32
図32	土師器皿b類の法量分布……………	33
図33	土師器皿c類の法量分布……………	34
図34	土師器小皿の法量分布……………	36
図35	外傾係数の変化……………	36
図36	中世建物の床面積分布……………	38

表 目 次

表1	土師器皿a類の法量……………	31
表2	須恵器皿a類の法量……………	32
表3	土師器皿b類の法量……………	33

表4	土師器皿c類の法量……………	34
表5	土師器小皿の法量……………	35
表6	中世建物の規模……………	39

写真図版目次

写真図版1	上段：調査地近景（東より） 中段：調査地近景（南より） 下段：1地区全景（北より）
写真図版2	上段：2地区 土坑70・71 遺物出土状況（南より） 中段：2地区弘強橋全景（南より） 下段：2地区東弘強部（北より）
写真図版3	上段：2地区西弘強部（北より） 中段：2地区 建物4（南東より） 下段：3地区全景（南東より）
写真図版4	上段：4地区東部（北より） 中段：4地区西部（西より） 下段：4地区 建物1（西より）
写真図版5	上段：1地区 包含層（1）・2地区 遺構出土土器（2～6） 中段：2地区 遺構出土土器 （7～9・11・12・14） 下段：2地区 遺構出土土器（10）
写真図版6	上段：2地区 遺構出土土器（13・15～18） 中段：2地区 遺構出土土器 （19～23・27・30・31）
写真図版7	上段：2地区 遺構出土土器（24・25） 中段：2地区 遺構出土土器（24・25）
写真図版8	上段：2地区 遺構出土土器（26・28・29） 中段：2地区 遺構出土土器（26・28・29） 下段：2地区 遺構出土土器（32～37）

写真図版9	上段：2地区 遺構出土土器（40） 中段：2地区 遺構出土土器（41） 下段：2地区 遺構出土土器（42）
写真図版10	上段：2地区 遺構出土土器（43） 中段：2地区 遺構出土土器（44・45） 下段：2地区 遺構出土土器・石製品 （50～53・55・56）
写真図版11	上段：2地区 遺構出土土器（48・49） 中段：2地区 遺構出土土器（48・49） 下段：2地区 遺構出土土器（54）
写真図版12	上段：2地区 遺構出土土器（57～63） 中段：2地区 遺構出土土器（64～72） 下段：2地区 遺構出土土器（73～77・79・82）
写真図版13	上段：2地区 遺構出土土器（78・80・81・83） 中段：2地区 包含層出土土器（87～91） 下段：2地区 包含層出土土器（92～97）
写真図版14	上段：2地区 包含層出土土器（98～102） 中段：2地区 包含層出土土器（103～108）
写真図版15	上段：4地区 遺構出土土器（109～114） 中段：4地区 遺構出土土器（115～118・120） 下段：4地区 遺構出土土器（119・121～126）
写真図版16	上段：4地区 遺構・包含層出土土器 （127・130～134） 中段：2・4地区 遺構・包含層出土鉄製品 （38・39・46・47・84～86・128・129・135）

第1章 調査の経緯と経過

農業が盛んな南あわじ市では、特産物のたまねぎをはじめとする野菜類と水稻を組み合わせた三毛作、あるいはこれに畜産を絡めた複合経営が広く普及しており、土地利用率が極めて高い。しかしこれを支える農家の大多数は専細経営規模である。また農地のほとんどは小区画で不整形、道路は狭小で用水路も未整備な場合が見受けられ、農作業に多大な労力を費やしているのが現状である。そのため労働生産性の向上を図る目的で大規模な圃場整備事業が近年、盛んに実施されている。

当調査の原因となる事業名は経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区）である。平成8年度には事業に先立ち、対象となる範囲において、旧南淡町教育委員会を調査主体とした遺跡分布調査が行われた。平成18年度には大日川東Ⅱ期地区5・6・7工区工事に伴う確認調査（1次調査）^(皇1)が行われ、弥生時代・中世の遺跡である久保ノカチ遺跡の存在がはじめて明らかになった。平成18・19年度にはその結果を受けて本発掘調査（2・3次調査）^(皇2)が行われ、中世後半を中心とする一般集落遺跡であることが明らかになった。

さらに平成19年度には大日川東Ⅱ期地区8・9工区工事に伴う確認調査（4次調査）^(皇3)が行われ、このうち9工区で遺跡の存在が確認された。この確認調査結果を基に事業者である兵庫県淡路県民局洲本土地改良事務所と協議・調整を行い、埋蔵文化財の破壊が免れない1～4地区において記録保存のため本発掘調査（5次調査）を行うことになった。当報告はこの本発掘調査の成果である。なお2地区は確認調査による推定範囲よりも遺跡が東西に広がっていることが明らかになったため、埋蔵文化財が影響を受ける範囲について調査区の拡張を行うことになった。

平成19年度に本発掘調査と平行して基本的な整理作業を行っていった。平成24～25年度は報告書作成に向けて、残りの整理作業を行っていくことになった。

・事務局（平成19年度）

教育長：塚本圭右 教育部長：三好雅大 次長：南幸正
生涯学習文化振興課長：岸上敏之 主幹：垣本義博
課長補佐：福田龍八

・確認調査（4次調査）

調査期間：平成19年6月20日～7月6日
調査面積：268㎡（2×2mの調査区67ヶ所）
調査担当者：南あわじ市埋蔵文化財調査事務所 山崎裕司
外業補助員：宇治田力・濱本善美

・本発掘調査（5次調査）

調査期間：平成19年7月31日～11月6日
調査面積：1,495㎡
調査担当者：山崎裕司
外業補助員：宇治田力・富岡美早子・濱本善美

・整理作業（平成19年度）

作業内容：出土遺物の洗浄・接合・整理・実測・写真整理



発掘調査風景



整理作業風景

整理担当者：山崎裕司

内業作業員：赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・
筒井健司・富岡美早子・豊田亜希子・濱崎真紀・
濱本善美・榎本早苗・三宅靖子

・事務局（平成24～25年度）

教育長：岡田昌史

教育部長：岸上敏之（平成24年度）・太田孝次（平成25年度）

次長：太田孝次（平成24年度）

生涯学習文化振興課長：山見嘉啓（平成24年度、所長兼務）・福原啓二（平成25年度）

主幹：川上洋介 課長補佐：福田龍八 埋蔵文化財調査事務所長：山見嘉啓

・整理作業（平成24～25年度）

作業内容：出土遺物の実測・トレース・写真撮影、遺構図面のトレース、報告書作成

整理担当者：山崎裕司

内業作業員：赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・榎本
早苗・松下矩之・三宅靖子



整理作業風景

第1章の註

1. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ 2006年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2010
2. 『久保ノカチ遺跡』南あわじ市教育委員会 2012
3. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 2007年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2011

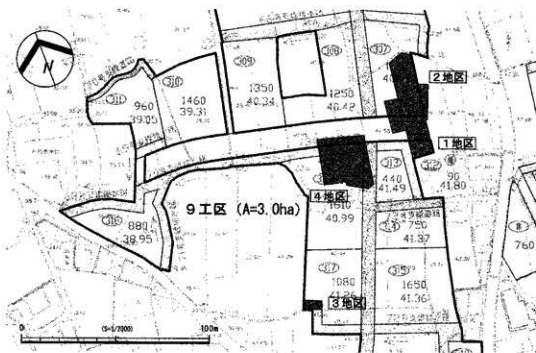


図1 調査区設定図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 淡路島南部の地形と気候

淡路島は、周囲203km、総面積592km²を有する瀬戸内海最大の島である。北は明石海峡、東は紀淡海峡、西は鳴門海峡により画され、古来より瀬戸内海の海上交通において重要な位置を占めてきたと思われる。

地質・地形的には、花崗岩から構成される北部の津名山地と和泉砂岩や頁岩から構成される南部の論鶴羽山地に大別される。論鶴羽山地の北西側には島内最大の三原平野が広がり、大日・三原・成相川などの各河川が、平野内を南東から北西方向へ播磨灘に流れ込む。

淡路島南部の気候は、瀬戸内海性気候に外洋性気候が加味された温暖な気候で年平均気温15～16℃、年平均降水量は全国平均よりやや少ない1,300mmを測る。



図2 南あわじ市の位置

2. 遺跡周辺の地形

久保ノカチ遺跡は南あわじ市賀集福井に所在する。

賀集地区は三原平野の南西端に位置し、東側には上述の論鶴羽山地、西側には南辺寺山塊が広がるため、特に遺跡の所在する地区南部は平野部とはいえ、山地に挟まれた狭小な地形である。

遺跡は三原平野を流れる主要河川の一つである大日川の中～上流域に位置し、扇状地の末端近くに立地する。調査地の標高はおよそ40～42mを測り、東南から北西方向に緩やかに傾斜する。

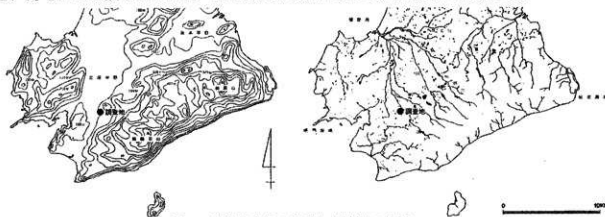


図3 淡路島南部の地形と調査地の位置

第2節 歴史的環境

①久保ノカチ遺跡（賀集福井）(図1・2・3)が所在する賀集地区では近年、圃場整備や下水道整備、オニオン道路・洲本灘賀集線（阿万バイパス）などの道路整備が行われ、大規模な開発事業が進展した。その結果、新しい遺跡の発見が相次ぎ、中には淡路島を代表するような重要な発見もあった。これらの新しく得られた知見を交えながら、賀集地区を中心とした歴史的環境を見ていくことにしたい。

1. 旧石器・縄文時代

大日川支流牛内川流域の②長原遺跡（賀集牛内）と③楠谷遺跡（賀集野田）ではサヌカイト製の有舌尖頭器を確認している。長原遺跡は散布地で、数点が表面採集されており、楠谷遺跡では確認調査時に1点が出土している(図4)。

論鶴羽山地北～西側の三原平野と接する緩斜面の地帯では、旧石器から縄文時代の早い段階での遺跡が比較的多く分布する。

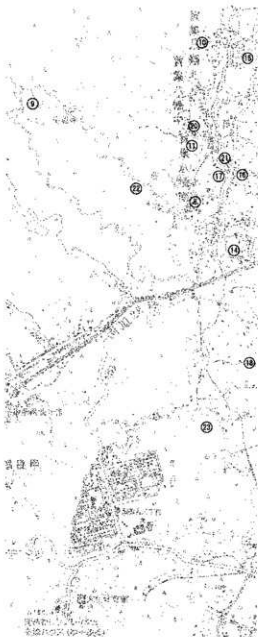
また兵庫県教育委員会によって行われた④神子曾遺跡（賀集鍛冶屋）の発掘調査で、縄文時代中期の廃棄土坑が検出されており(図5)、遺跡周辺の分布調査では縄文時代のサヌカイト製の石鏃が多数採集されていることから(図6)、周辺にこの時期の集落が展開していた可能性が高い。

2. 弥生時代

平成16年度の⑤塚ヶ淵遺跡（賀集立川瀬）の発掘調査では、弥生時代前期末～中期初頭頃の土器や木製農耕具等が溝から出土した。平成14～15年度の発掘調査では、弥生時代中期前葉頃と考えられる円形竇穴住居が検出されており、前～中期において継続して集落が営まれていたと推定される(図6)。

弥生時代中期には、上述した神子曾遺跡の調査において、島内最大規模の周溝墓群が検出されており、周辺に三原平野でも中心的集落が展開していた可能性が高い。また後・終末期の遺構も検出されている(図5)。

三原平野周辺の河川の中・上流域において、久保ノカチ遺跡を含め、弥生時代中期～終末期に属する小規模な遺跡の発見事例が増えつつある。賀集地区においては、大日川上流左岸に位置し、弥生時代中期後半頃の自然流路や弥生時代後期前半頃の竇穴住居が検出された⑥高萩遺跡（賀集福井）(図7)、大日川上流右岸に位置し、弥生時代終末期の土坑が検出された⑦芥つノ木遺跡（賀集生子）(図6)、南辺寺山東側山麓に位置し、後期～終末期の竇穴住居が検出された⑧護国寺東遺跡（賀集八幡南）(図4)、南辺寺山山頂の遺物散布地である⑨西山遺跡（賀集八幡南）などが分布する。



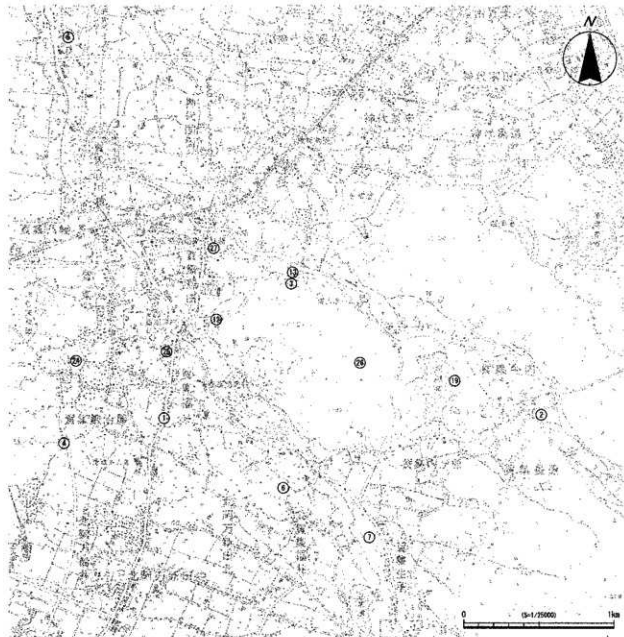


図4 調査地周辺の遺跡（図と文章中の番号は対応する）

3. 古墳時代

南辺寺山東側山麓には⑩西山北古墳（賀集八幡北）・⑪西山南古墳（賀集八幡南）があり、西山北古墳は石室全長8.02mで⑥、現存する横穴式石室墳としては島内最大規模で、島内の有力な首長墓の一つと推定される。また論鶴羽山地西側山麓にも、⑫野田山古墳（賀集野田）・⑬小山古墳（賀集野田）等の横穴式石室墳がある④。賀集地区では、前・中期の古墳は今のところ未発見である。

中期の⑭平松遺跡（賀集八幡）では、堰状遺構付近に土器だまりが形成され、完形に近い手づくね土器6点等が出土しており、水にまつわる祭祀を行ったと推定されている⑧。また近年、市内でも出土例が増えつつある韓式系土器が2点出土している⑨。

4. 歴史時代

古代三原郡は倭文・韓多・養宜・覆列・神給・阿方・賀集の七郷から構成されていた。淡路島では古代地名が比較的多く残存しており^(註1)、これらの古代地名のほとんどが現在の地区の名称として使われている。賀集郷には線ヶ洲遺跡をはじめとして官衙的な遺跡が多く分布することから、淡路国において重要な役割を果たしていた地区と推定される。

線ヶ洲遺跡では7世紀末～8世紀初葉頃の大型掘立柱建物群が検出され、踏脚円面硯をはじめとして各種硯が出土している。三原郡衙関連遺跡でかつ国府的機能の一端を担っており、さらに遺跡のすぐ西側に大日川が流れていることから、港の機能があつたと推定されている^(註2)。近年の重要な発掘調査成果の一つである。

また大型方形柱穴が検出された^(註3)石ヶ坪遺跡(賀集八幡北)、円面硯や緑釉陶器が出土した^(註4)大野遺跡(賀集八幡南)^(註5)、倉庫と思われる総柱建物群が検出された^(註6)岸ノ上遺跡(賀集八幡南)^(註7)の他、銀製の和銅開閉が表面採集されている賀集鍛冶屋周辺^(註8)にも官衙的な遺跡が存在する可能性が高い。^(註9)才門遺跡(賀集鍛冶屋)は官衙遺跡ではないが、律令期の建物が検出されている^(註10)。

^(註11)戸川池窯跡(賀集牛内)では、8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器が多数表面採集されている^(註12)。

護国寺は八木の淡路国分寺や成相寺同様、律令期に起源をもち、現存する極めて長い歴史をもつ寺社であり、護国寺東遺跡では10世紀頃と思われる軒平瓦が出土している^(註13)。

賀集郷は中世になると賀集庄となり、賀集寺とも呼ばれた護国寺は賀集八幡神社の神宮寺として繁栄し、多くの院坊(塔頭)をもっていたことがわかっている。護国寺東遺跡では、その位置から院坊の建物ではないかと思われる14～15世紀頃の掘立柱建物等が検出されている^(註14)。

賀集地域には中世城館も極めて多く、^(註15)佐々木土居城跡(賀集八幡南)・^(註16)西山南土井館跡(賀集八幡南)・^(註17)城が丸城跡(賀集八幡)・^(註18)古城山城跡(賀集鍛冶屋)・^(註19)賀集城の腰城跡(賀集賀集～賀集鍛冶屋)・^(註20)城の土井城跡(賀集福井)・^(註21)丹生山城跡(賀集野田)が分布する。

中世の集落跡としては、久保ノカチ遺跡の他、^(註22)上久保遺跡(賀集野田)^(註23)で掘立柱建物等が検出されている。

第2章の註

1. 『久保ノカチ遺跡』南あわじ市教育委員会2012
2. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ 2006年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会2010
3. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 2007年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会2011
4. 『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 1995～1999年度 埋蔵文化財発掘調査』三原郡広域事務組合2001
5. 『平成16年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2006
6. 『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 2000～2004年度 埋蔵文化財発掘調査』南あわじ市教育委員会2008
7. 『高萩遺跡』南あわじ市教育委員会2011
8. 松下智義「平松遺跡出土の韓式系土器について」『のじぎく文化財保護研究財団 紀要 創刊号』のじぎく文化財保護研究財団1996
9. 定松伴重・谷口精「南あわじ市出土の韓式系土器について」『韓式系土器研究Ⅱ』韓式系土器研究会2006
10. 武田信一『淡路島の地名研究』兵庫県地名研究会1996
11. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅴ 2008年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会2012
12. 浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌 第3号』淡路考古学研究会1977

第3章 調査成果

第1節 1地区

標高は約41m、面積は145㎡で、2地区に隣接する。

1. 層序 (図6)

5～7層は中世の遺物を少量含む。比較的安定した8層上面で中世の遺構を検出した。



図5 1地区の位置



- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 攪乱 2. 黄灰色2.5Y6/1砂質土 (粘土、腐り磯少し含む) 3. にぶい黄色2.5Y6/4細砂質土 (粘土、腐り磯含む) 4. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (腐り磯少し含む) | <ol style="list-style-type: none"> 5. 楊灰色10YR5/1砂質土 (Mn沈着、遺物含む) 6. 楊灰色7.5YR4/1細砂質土 (Mn沈着、遺物含む) 7. 黒褐色10YR3/1細砂質土 (遺物少し含む) 8. 明黄褐色10YR6/6砂質土 (地山) |
|--|--|

図6 1地区 北壁層序図

2. 遺構 (図8、写真図版1)

中世の遺構が検出された。隣接する2地区に比べ、検出遺構は非常に少なく、遺跡周縁部に近い位置にあると思われる。

3. 遺物 (図7、写真図版5)

図化できた資料は包含層から出土した1のみである。天目茶碗の高台部分で復元底径は1.4cmである。



図7 1地区 包含層出土遺物

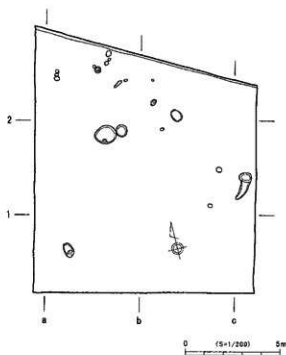


図8 1地区 平面図

第2節 2地区

標高は約41m、調査区の面積は約670㎡である。今回、最も多く遺構が検出できた地区で、掘立柱建物が6棟復元できた。

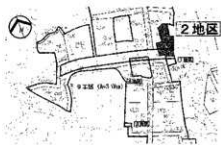


図9 2地区の位置

1. 層序 (図10)

6～8層は中世の遺物を含む。これらの層から掘り込まれた遺構が存在するようであるが、埋土との判別が困難であることから、比較的安定した23・25層の上面で検出を行った。調査区北側には人頭大の礫を含む不安定な24層が広がり、分布する遺構は少なくなる。

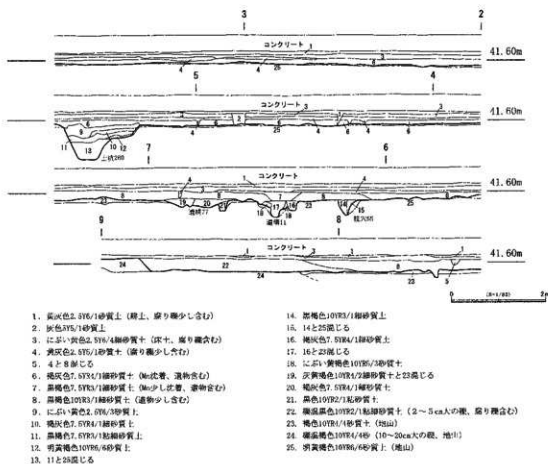


図10 2地区 東壁層序図

2. 遺構 (図11、写真図版2・3)

地区中央から南側にかけて中世の遺構が密集しており、掘立柱建物3～8、柵列1～6が復元できた。建物群中、建物4が最大規模で、建物5は建物4を建て替えたと推定される。建物の対応関係や変遷については後述する。土坑70・71からは多くの遺物が出土したが、中でも備前焼の大甕が5個体以上出土したことは特筆される。

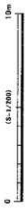
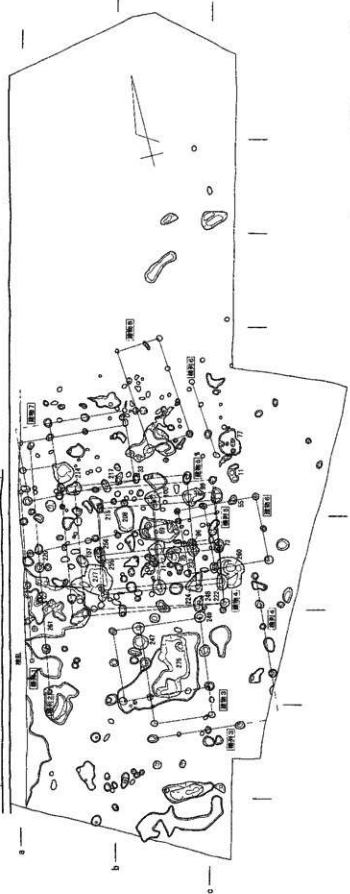
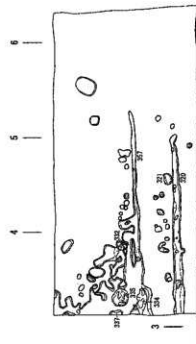
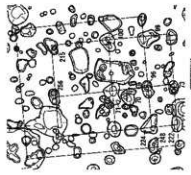
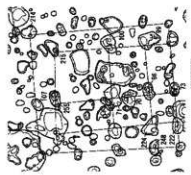


图 11 2地区 平面图

建物3 (図12) 建物南西隅の柱穴が検出できなかったことと、建物南側と西側の柱穴の規模が小さかったことから、南側1間×1間と西側1間×2間は廂部分と判断した。母屋部分は梁行1間×桁行2間と思われる。母屋部分の面積は約11.8㎡、廂部分を含めると約21.2㎡の規模となる。建物東側の柱筋がN6°Eを示す。

建物4 (図13、写真図版3) 建物北東隅の柱穴が検出できなかったことと、建物北・西・南側の柱穴の規模が小さかったことから、北・西・南側の3面に廂が付属す

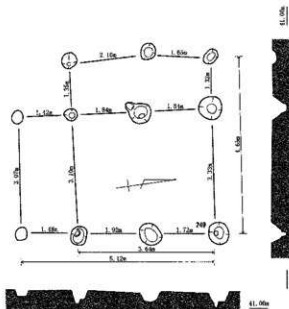


図12 2地区 建物3平面・断面図

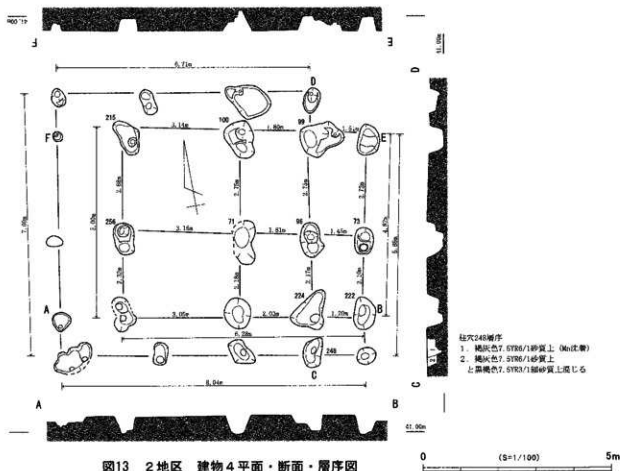


図13 2地区 建物4平面・断面・層序図

る構造と判断した。母屋部分は梁行2間×桁行3間の総柱構造と思われる。母屋部分の面積は約30.8㎡、
 廂部分を含めると約54.0㎡となり、当調査の復元建物中、最大規模である。また2つの柱痕が並ぶ柱穴
 が多く見られることから、建て替えが行われたと判断した。切り合いから古い方を建物4、新しい方を
 建物5とした。建物東側の柱筋がN9°Eを示す。

建物5 (図14) 上述のように建物4を建て替えた建物で、建物4と同様、建物北・西・南側の3面に
 廂部分が付属する構造と思われる。母屋部分は梁行2間×桁行3間の総柱構造と思われる。母屋部分の
 面積は約27.0㎡で建物4より一まわり小さく、南側の梁行が狭くなっている。廂部分を含めると約47.1㎡
 の規模となる。建物東側の柱筋がN9°Eを示す。

建物6 (図15) 柱穴の規模が変わらないことから、西側の1×2間は廂部分ではないと思われる。梁
 行2間×桁行3間の側柱構造で、面積は約14.4㎡となる。建物東側の柱筋がN3°Eを示す。

建物7 (図15) コンクリート吐造成時の攪乱範囲内のため建物北西隅の柱穴は検出できなかった。た
 だし建物北側の1間×2間は柱穴規模から廂部分と思われ、元々北西隅の柱穴は存在しなかった可能性
 も考えられる。母屋部分は梁行2間×桁行3間の側柱構造と思われる。母屋部分の面積は約17.7㎡、廂
 部分を含めると約20.7㎡となる。建物東側の柱筋がN4°Eを示す。

建物8 (図15) 梁行1間×桁行3間で、面積は約12.1㎡となる。建物東側の柱筋がN4°Wを示す。

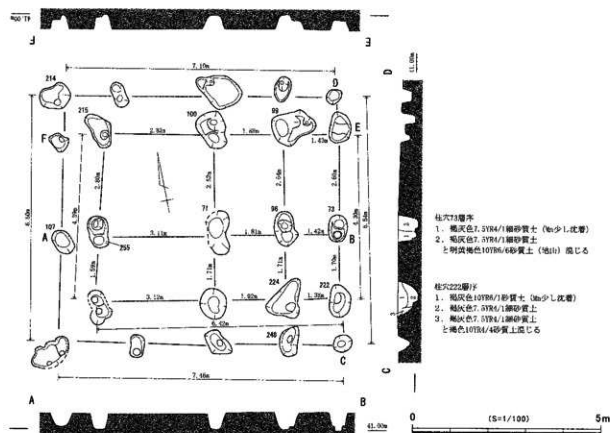


図14 2地区 建物5平面・断面・層序図

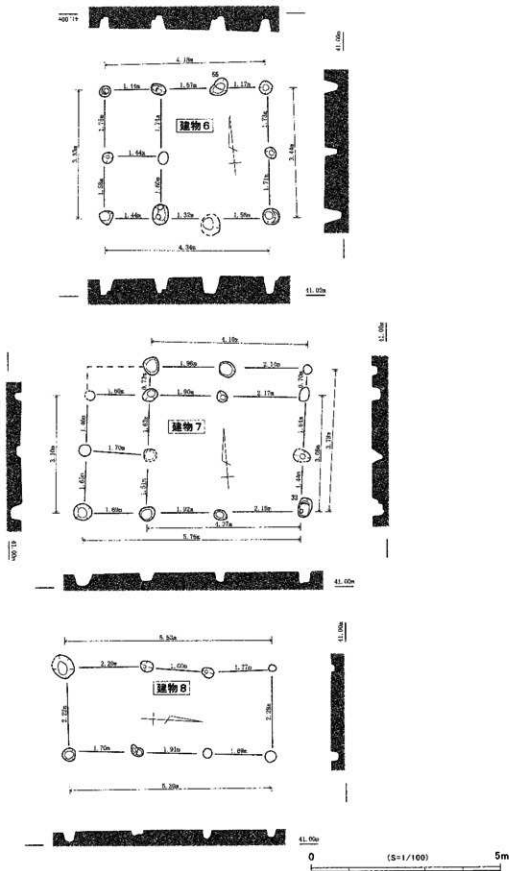


图15 2地区 建物6~8平面·断面图

柵列1～6 柱穴が一行に並んだものを柵列とした。柱間は不規則である。すべて建物と対応することから塀のような施設の可能性も考えられる。柵列1・2はN11° Eを示し、建物4・5西側の柱筋とほぼ平行する。加えて柵列1と建物4西側、柵列2と建物5西側の間隔が約2.2mで同じであることから、柵列1は建物4、柵列2は建物5に付属する可能性が高い。柵列3はN85° W、柵列4はN6° Eを示し、建物3とほぼ同方位であることから、建物3に付属すると考えられる。柵列5はN88° Wを示し、建物6・7とほぼ同方位であるが、建物6と重なることから建物7に付属すると考えられる。柵列6はN4° Wを示し、建物8と同方位で、建物8に付属すると考えられる。

溝320・332・357 N12° Eで平行し、柵列1・2や建物4・5に近い方位を示す。溝357と西側に隣接する溝332の切り合いは確認できなかった。最深部の深さが、溝320は約22cm、溝332は約27cm、溝357は約12cmを測る。

土坑70・71 (図16、写真図版2) 建物4・5の柱穴を切っており、これらの建物の廃絶後に掘削された土坑である。5個体以上の備前焼大甕が破片化した状態で出土している。土坑70・71それぞれから出土した破片で接合できたものが多数あり、遺構検出面より上層部ではこれらの土坑を含む一帯に遺物が広がっている状況であったことから、別々の土坑ではなく遺構検出面より上層部から掘り込まれた一つの土坑と推定される。遺構の性格については、後述するように廃棄物等の埋め戻しのために掘削された土坑と考えられる。

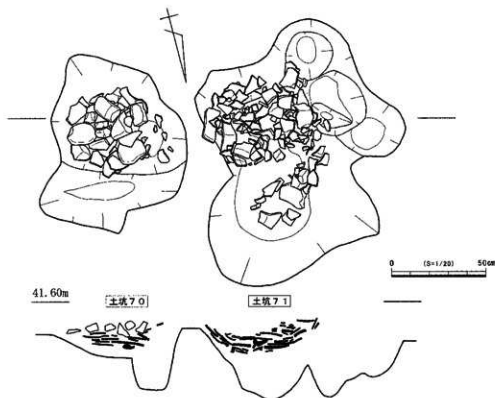


図16 2地区 土坑70・71遺物出土状況平面・断面図

3. 遺物

遺構・包含層から、中世の遺物が出土している。遺構出土遺物については、先に建物柱穴と建物群と密接に関係する柵列2柱穴および溝320・332・357の出土遺物を取り上げ、次に土坑70・71、次にその他の遺構にわけて説明する。

(1) 遺構出土遺物 (図17～19、写真図版5～13・16)

建物3柱穴 2・3は柱穴249から出土した土師器皿である。2は体部上半が少し内湾し、器壁が薄い。口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.6cmを測る。3の底部外面には回転糸切痕が残る。復元底径8.2cmを測る。

建物4・5柱穴 4は建物4の柱穴256から出土した土師器小皿である。体部は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。復元口径7.8cmを測る。5は建物5の柱穴214から出土した青磁の口縁部片で、少し外反し、口縁端部を丸くおさめる。6以下は、建物4・5のいずれの柱穴に属するか不明な遺物である。6は柱穴73から出土した東播系須恵器の鉢で、体部上半は少し外反し、口縁端部を上下に拡張する。復元口径23.0cmを測る。7～9は柱穴96から出土した。7は白磁の合子の身と思われる。底部外面は無軸で、復元底径8.0cmを測る。8は土師器小皿で、体部は少し外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。9は土師器皿と思われ、底部外面には回転糸切痕が残る、体部下半は内湾気味である。復元底径7.0cmを測る。

10・11は柱穴99から出土した。10は素焼きに近い焼成の甕であるが、おそらく焼成の悪い須恵器と思われる。体部外面には綾杉文を施し、口縁端部は凸帯状になっている。復元口径26.0cmを測る。11は土師器皿で、体部上半は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。復元口径11.6cmを測る。12は柱穴100から出土した。土師器皿と思われ、底部外面には回転糸切痕が残る。復元底径6.4cmを測る。13は柱穴215から出土した東播系須恵器の鉢で、体部下半は少し内湾し、上半は少し外反する。口縁端部を上下に拡張する。14・38は柱穴222から出土した。14は青磁で劃花文の碗等の破片と思われる。38は釘状の鉄製品であるが、断面方形で中空になっており、用途不明である。15は柱穴224から出土した土師器小皿で、底部外面は回転糸切痕が残る、体部は少し外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径7.8・復元底径5.8・器高1.0cmを測る。16は柱穴248から出土した。土師器小皿と思われ、底部外面には回転糸切痕が残る。復元底径は5.4cmを測る。

建物7柱穴 17は柱穴33から出土した劃花文の青磁碗の体部片で、内湾する。

柵列2柱穴 18は柵列2の柱穴220から出土した土師器小皿で、体部は内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。全体に磨耗する。復元口径6.1・復元底径5.2・器高0.9cmを測る。

溝320・332・357 19が溝320、20～23が溝332、24～37・39が溝357から出土した。19は播磨型の羽釜形タイプ土製煮炊具(遺1)の口縁部と思われる。20～22は土師器小皿で、20の底部外面には回転糸切痕が残るが、21・22は磨耗している。すべて口縁端部は尖り気味で、体部は少し外反する。20は復元口径7.4・復元底径6.0・器高1.1cm、21は復元口径7.3・復元底径5.8・器高1.4cm、22は器高1.2cmを測る。23は須恵器皿と思われ、底部外面に回転糸切痕が残る。体部下半は少し内湾する。復元底径5.7cmを測る。24～27は土師器皿で、磨耗した27を除き底部外面には回転糸切痕が残る。すべて体部下半は内湾気味であるが体部上半は直線的で、体部中位を少し肥厚し、口縁端部を尖り気味におさめる。24は口径12.3・底径6.7・器高3.8cm、25は口径11.2・底径6.3・器高3.7cm、26は復元口径12.3・底径6.5・器高3.5cm、27は復元口径11.6・復元底径6.6・器高3.0cmを測る。28～31は土師器小皿で、磨耗した31を除き底部外面に

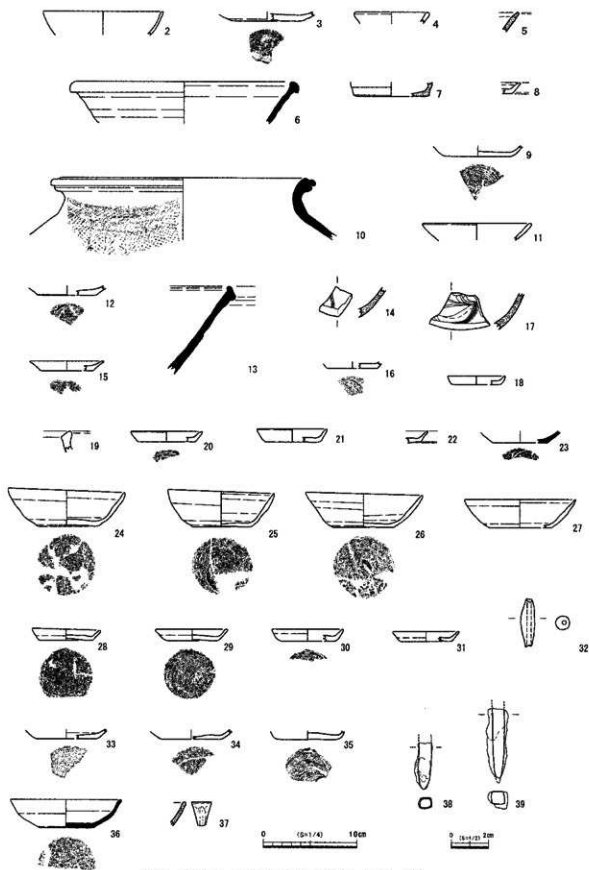


图17 2地区 遺構出土遺物(建物、櫓列、溝)

回転糸切痕が残る。29・30の体部は直線的で、28・31はやや外反気味である。29は口縁端部を丸くおさめ、28・30・31は尖り気味におさめる。28は口径7.1・底径5.6・器高1.2cm、29は復元口径7.4・底径5.3・器高1.2cm、30は復元口径7.4・復元底径5.8・器高1.3cm、31は復元口径6.9・復元底径5.4・器高1.1cmを測る。32は有孔土錘である。長さ5.1・最大径1.5cmで孔の径は0.4cmを測る。33~35は土師器皿と思われる、底部外面に回転糸切痕が残る。体部下半が内湾気味になる形態と思われる。33は復元底径6.4cm、34は復元底径6.4cm、35は復元底径6.2cmを測る。36は須恵器皿で、口縁部に重ね焼き痕が見られる。底部外面に回転糸切痕が残る。体部中位で内側に屈曲し、口縁部はやや外反気味で端部を丸くおさめる。復元口径11.6・底径5.9・器高3.0cmを測る。37は蓮弁文の青磁碗の口縁部片で、内湾し、口縁端部を丸くおさめる。39は釘の先端部と思われる。

土坑70・71 先述のように本来は一つの土坑と考えられ、40~43はそれぞれの土坑から出土した破片で復元された。その他の45・48~52・55は土坑71、47・53・54は土坑70、44・46・56は上層部から出土した。

40~42・44・45は備前焼の大甕で別個体と判断される。口縁部はやや外反し、口縁端部を外側に折り曲げて玉縁状に仕上げられており、楕円形を呈する。体部内面には横方向、外面下半は縦方向、外面上半は斜め方向のハケメが施されている。40は口径36.8・頸部径34.4・体部最大径60.9・底径32.5・器高66.7cmを測る。41は復元口径34.6・復元頸部径33.2cmを測る。42は口径38.8・頸部径37.0・体部最大径66.0cmを測る。43は須恵質の大甕で、口縁部をクロコナゲし端部を丸くおさめる。体部外面にタタキ、内面はハケメを施す。復元口径38.4・復元頸部径37.0・復元体部最大径52.2cmを測る。

46・47は釘と思われる鉄製品で、46が先端部、47が頭部である。

48~51は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。48・49の体部は内湾気味で、器壁が薄い。48は口縁端部を丸く、49は尖り気味におさめる。50・51の体部下半は直線的である。48は口径12.7・底径7.0・器高3.0cm、49は口径12.6・底径6.7・器高3.6cm、50は復元底径6.0cm、51は底径6.7cmを測る。52・53は土師器小皿で、53の底部外面には回転糸切痕が残り、52は回転糸切後ナデを施しているようである。52の体部は直線的で、53は少し内湾する。ともに口縁端部を丸くおさめる。52は復元口径7.9・底径5.9・器高1.6cm、53は復元口径7.1・底径4.7・器高1.7cmを測る。54は東播系の須恵器鉢で、底部外面に回転糸切痕が残る。体部は少し内湾し、口縁端部を上下に拡張する。口縁部内側が少し凹む。復元口径27.2・復元底径10.9・器高10.5cmを測る。55は石製の硯である。幅5.5cmを測る。56は刺花文の青磁碗の口縁部片で、少し外反し、口縁端部を丸くおさめる。

その他の遺構 57・58・84は土坑69から出土した。57は土師器皿と思われる、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.0cmを測る。58は土師器小皿で、体部は内湾し、器壁が薄い。口縁端部を丸くおさめる。復元口径6.5・復元底径4.1・器高0.9cmを測る。84は鉄製品で、小刀の先端部ではないかと思われる。

59~62は土坑208から出土した。59は土師器皿で、体部上半は少し外反し、器壁が薄い。口縁端部を丸くおさめる。復元口径14.2cmを測る。60は土師器小皿で、体部は内湾し、器壁が薄い。口縁端部を丸くおさめる。復元口径7.5cmを測る。61は土師器皿と思われる。体部下半は直線的である。復元底径6.6cmを測る。62は須恵器皿で、口縁部に重ね焼き痕が見られる。体部上半は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.2cmを測る。

63は遺構217から出土した。土師器皿と思われる、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.6cmを測る。

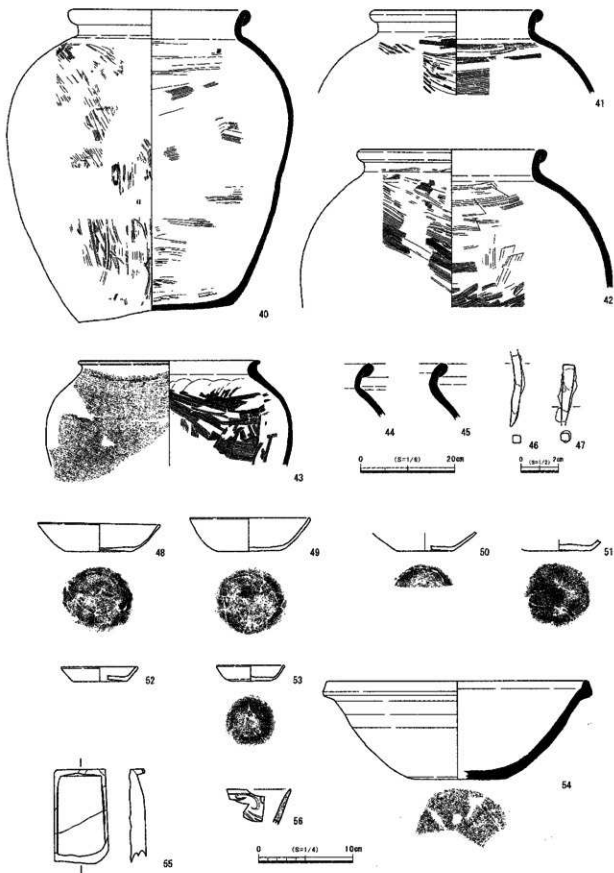


图18 2地区 遺構出土遺物 (土坑70・71)

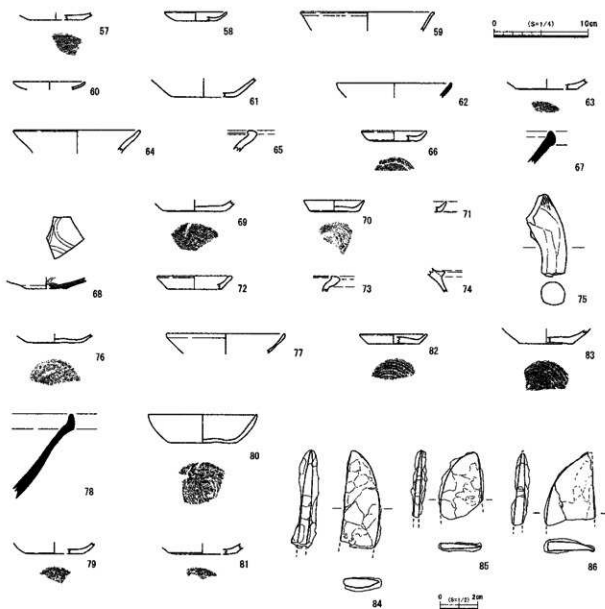


図19 2地区 遺構出土遺物（その他の遺構）

64は遺構232から出土した土師器皿で、体部中位で少し外反し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径13.4cmを測る。

65は土坑247から出土した土製煮炊具の口縁部片で、端部を内側に折り曲げる。胎土に砂粒を非常に多く含み、紀伊型の羽釜(注1)ではないかと思われる。

66～68は窪地状の遺構261から出土した。66は土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径6.8・復元底径5.5・器高1.1cmを測る。67は東播系須恵器鉢で、口縁端部を少し上下に拡張する。68は瓦器塊の底部片で、低い三角の高台が付き、内面には輪状のヘラミガキが施されている。復元底径4.2cmを測る。

69～75・86は窪地状の遺構275から出土した。69は土師器皿と思われ、底部外面に回転糸切痕が残る。

体部下半は直線的である。復元底径6.6cmを測る。70～72は土師器小皿である。70の底部外面には回転糸切痕が残る。すべて体部は直線的で、70・71の口縁端部は尖り、72は丸くおさめる。70は復元口径6.4・復元底径5.2・器高1.2cmを測る。71は器高1.1cmを測る。72は復元口径7.8・復元底径5.6・器高1.4cmを測る。73～75は土製煮炊具と思われる。73は口縁部が「く」字状を呈すると思われ、口縁端部は面をなす。74は胎土に砂粒を多く含み、紀伊型の羽釜(註2)の鈔部ではないかと思われる。75は三足鍋の足部分と思われる。86は鉄製品で、鎌等の先端部ではないかと思われる。

76～78は土坑277から出土した。76・77は土師器皿で、器壁が薄く、同一個体の可能性がある。76は底部外面に回転糸切痕が残る、体部下半は直線的である。復元底径5.8cmを測る。77は体部上半が少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.5cmを測る。78は東播系須恵器鉢である。口縁端部を上下に拡張し、口縁部内側に凹みが見られる。101と同一個体と思われる。

79は遺構321から出土した。土師器皿と思われ、底部外面に回転糸切痕が残る。体部下半は内湾する。復元底径6.2cmを測る。

80・81は遺構334から出土した。80は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。体部は少し内湾する。体部中位を少し肥厚し、口縁端部は尖る。復元口径11.4・復元底径7.3・器高3.0cmを測る。81は土師器皿と思われ、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径7.2cmを測る。

82は土坑335から出土した土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。体部は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。復元口径7.2・復元底径5.4・器高1.1cmを測る。

83は遺構337から出土した。土師器皿と思われ、底部外面に回転糸切痕が残る。体部下半は直線的である。復元底径5.8cmを測る。

85は土坑260から出土した。鉄製品で鎌等の先端部と思われる。

(2) 包含層出土遺物 (図20、写真図版13・14)

87～90は土師器皿である。87の底部外面は回転糸切後ナデを施す。体部は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.3・底径6.0・器高2.7cmを測る。88は全体に磨耗する。体部は直線的で、器壁が薄い。口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.4・復元底径8.1・器高3.1cmを測る。89は体部下半が内湾するが体部上半は直線的で、体部中位を少し肥厚し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.0cmを測る。90は体部上半が直線的で、器壁が薄い。口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.9cmを測る。

91・92は土師器小皿と思われる。91は全体に磨耗しており、体部は少し内湾し、器壁が薄い。復元底径6.1cmを測る。92は体部が少し内湾し、器壁が薄い。口縁端部を丸くおさめる。復元口径7.0cmを測る。

93～99は煮炊具で、93～96・99が土師質、97・98が瓦質である。93は口縁端部に面をつくり、外側に少し拡張する。94は口縁端部に面をつくり、内側に拡張する。95は胎土に砂粒を多く含み、紀伊型の羽釜(註2)の口縁部と思われる。口縁部内側を少し拡張する。96は体部内側にハケメが施される。口縁部は外側に屈曲し内湾する。口縁端部に面をもつ。97は羽釜と思われる。体部上半は内湾し、鈔は退化している。口縁端部に面をもつ。98・99は三足鍋の足部と思われる。

100～108は東播系須恵器鉢である。100の体部上半は少し内湾する。口縁端部を下方に少し拡張する。復元口径30.4cmを測る。101の体部下半は少し内湾し、上半は少し外反する。口縁端部を上方に大きく

拡張し、内側に凹みが見られる。復元口径25.6cmを測る。78の近辺から出土しており、同一個体と思われる。102は口縁端部を上方に大きく拡張し、内側に凹みが見られる。103・104は口縁部片で、101・102ほど口縁端部を上方に拡張せず、内側の凹みもわずかである。105・106は口縁部にあまり丸みが無い仕上げで、105は口縁端部を下方に少し拡張するが、上方にはほとんど拡張せず、内側の凹みもほとんど無い。106は口縁端部を上下に拡張し、内側に凹みが見られる。107は口縁端部を内側に折り曲げるような形態になっている。108の口縁端部は上方への拡張は少なく、凹みもわずかである。体部下半は少し内湾する。復元口径29.6・復元底径11.9・器高9.0cmを測る。

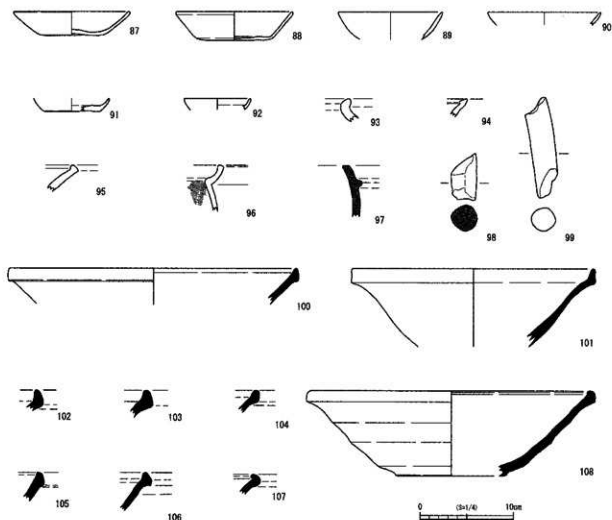


図20 2地区 包含層出土遺物

第3節 3地区

標高は約40m、面積は20㎡である。遺跡範囲外の可能性が高い。

1. 層序 (図22)

9・10層上面で遺構検出を行った。

2. 遺構 (図22、写真図版3)

自然地形と思われる窪みをいくつか検出したが、人為的に掘削されたと思われる遺構は検出されなかった。

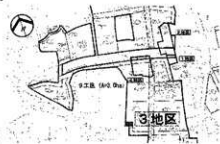
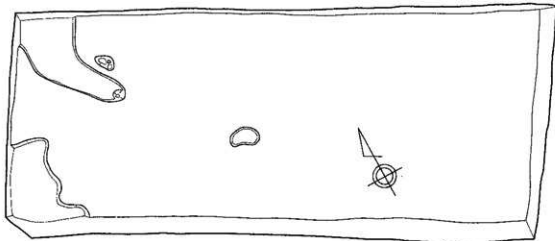


図21 3地区の位置

3. 遺物

流れ込みと思われる磨耗した土器片が数点出土したのみで、岡化可能な資料は出土していない。



- | | |
|-------------------------|--------------------------------------|
| 1. 擾乱 | 6. 褐灰色7.5YR4/1～黒褐色5/1粘砂質土(Mn沈着) |
| 2. 黄灰色2.5Y6/1砂質土(耕土) | 7. 褐色褐灰色7.5YR4/1粘砂質土(2～5cm大の礫、腐り礫含む) |
| 3. にぶい黄色2.5Y6/4細砂質土(床土) | 8. 灰褐色7.5YR4/2粘砂質土(腐り礫含む) |
| 4. 褐灰色10YR6/1砂質土 | 9. 裸泥にぶい黄褐色10YR6/4粘砂質土(2～10cm大の礫、地山) |
| 5. 褐灰色7.5YR6/1砂質土(Mn沈着) | 10. 黄褐色10YR5/6粘砂質土(地山) |

図22 3地区 北東壁層序・平面図

第4節 4地区

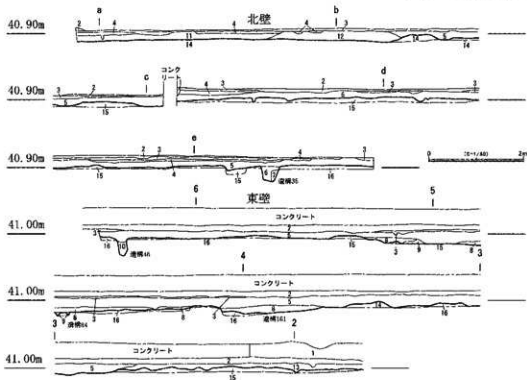
標高は約41m、調査区の面積は約660㎡である。掘立柱建物が2棟復元できた。

1. 層序 (図24)

5層は中世の遺物を含む。比較的安定した15・16層の上面で遺構検出を行った。調査区西側には礫を含む不安定な14層が広がりに、分布する遺構は極めて少なくなる。



図23 4地区の位置



- | | |
|-----------------------------|--|
| 1. 攪乱 | 9. 8と15混じる |
| 2. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (耕土) | 10. 5と16混じる |
| 3. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (床土、腐り礫含む) | 11. 黒褐色10YR3/1細砂質土 (腐り礫含む) |
| 4. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (腐り礫少し含む) | 12. 礫混黒褐色10YR3/1細砂質土 (5~10cm大の礫、腐り礫含む) |
| 5. 黒褐色10YR3/1細砂質土 (遺物少し含む) | 13. 黒褐色10YR3/2砂質土 (腐り礫少し含む) |
| 6. 黒褐色10YR3/1砂質土 (炭含む) | 14. 礫混黒褐色10YR3/2砂 (5~10cm大の礫) |
| 7. 6と15混じる | 15. 黄褐色10YR5/6砂質土 (地山) |
| 8. 黒褐色7.5YR3/1細砂質土 | 16. 褐色7.5YR4/3 細砂質土 (地山) |

図24 4地区 北壁・東壁層序図

2. 遺構 (図25、写真図版4)

中世の遺構を検出した。復元できた掘立柱建物2棟はほぼ同規模で同方位であることから、建て替えが行われたと考えられる。

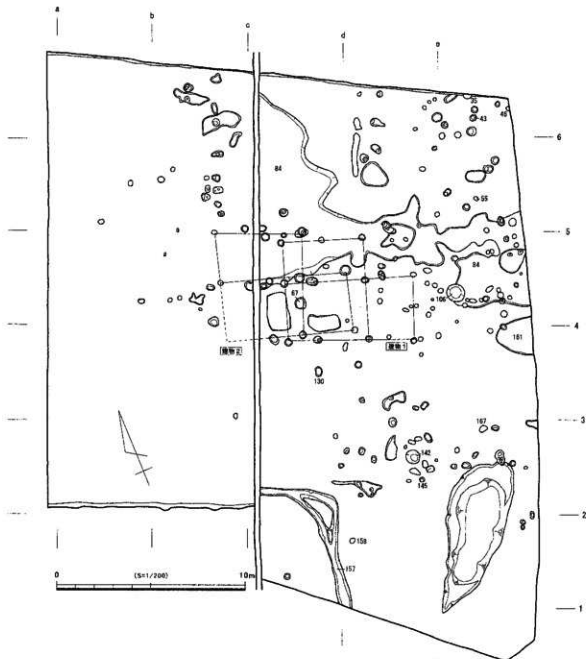


図25 4地区 平面図

建物1 (図26、写真図版4) 2地区建物3と同じ構造、すなわち東側の1×1間と北側の1×2間は廂部分と判断した。母屋部分は梁行1間×桁行2間で約13.1㎡、廂部分を含めると約30.7㎡の規模となる。建物東側の柱筋がN23° Eを示す。

建物2 (図26) 南西隅の柱穴が検出できなかったが、建物1と同じ構造で建て替えが行われたと判断した。すなわち東側の1×1間と北側の1×2間は廂部分と思われる。母屋部分は梁行1間×桁行2間で約13.1㎡、廂部分を含めると約33.0㎡の規模となる。建物東側の柱筋がN17° Eを示す。

溝157 西側は耕地造成に伴う削平を受けているが、N65° Wで建物1・2と同じような方位を示す。屋敷地を区画する等、建物と何らかの関わりをもつ溝と思われる。

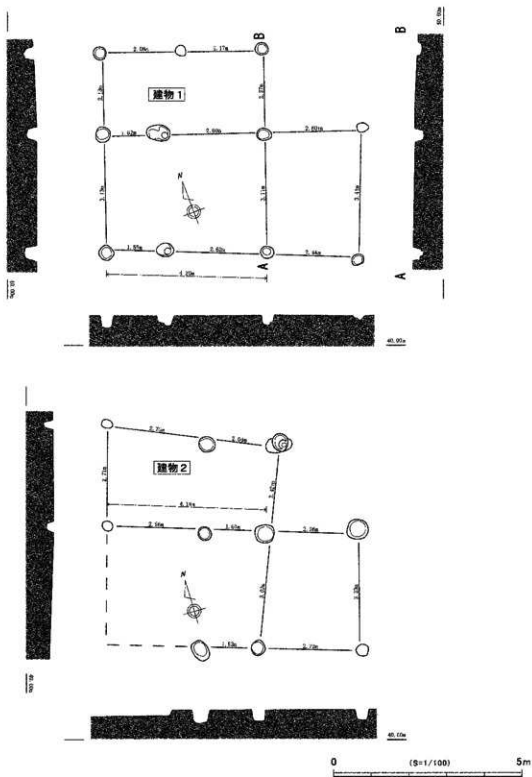


図26 4地区 建物1・2平面・断面図

3. 遺物

遺構・包含層から、中世の遺物が出土している。建物柱穴から出土した遺物は無い。

(1) 遺構出土遺物 (図27、写真図版15・16)

109～112は遺構35から出土した。109・110は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。109は体部内湾し、口縁端部を丸くおさめる。口径12.0・底径6.4・器高3.5cmを測る。110は体部下半が内湾する形態と思われる。復元底径7.2cmを測る。111・112は土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。111は体部が直線的で、器壁が薄い。口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径6.9・復元底径5.3・器高1.1cmを測る。112は体部が直線的で、口縁端部を丸くおさめる。口径7.4・底径5.3・器高1.2cmを測る。

113は遺構43から出土した土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。体部は内湾する形態と思われる。底径5.0cmを測る。

114は遺構67から出土した。坏H身のような形態をしているが器種不明の土師器である。復元口径16.0cmである。

115～121は窪地状の遺構84から出土した。115は東播系須恵器鉢で、口縁端部を下方に拡張する。116は須恵器皿と思われ、底部外面は少し突出し、回転糸切痕が残る。復元底径7.1cmを測る。117は東播系須恵器鉢で、口縁端部を下方に少し拡張し、内側に少し凹みが見られる。復元口径26.0cmを測る。118～121は土師器皿と思われる。118の底部外面は回転糸切後ナデを施している。体部は内湾し、器壁が薄い。口

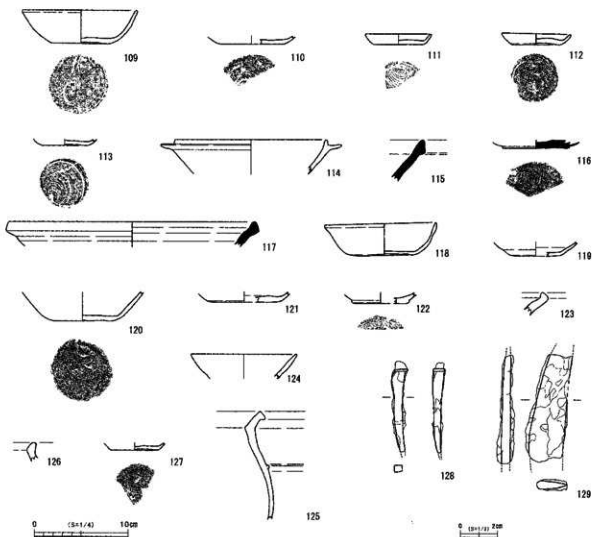


図27 4地区 遺構出土遺物

縁端部は尖る形態である。口径11.8・底径7.0・器高3.4cmを測る。119は全体に磨耗している。体部下半は直線的で、少し反外する段が見られる。復元底径5.3cmを測る。120は底部外面に回転糸切痕が残る。体部は直線的である。底径6.4cmを測る。121は全体に磨耗しており、体部下半は内湾する形態と思われる。復元底径7.9cmを測る。

122は土坑106から出土した土師器皿で、底部外面は突出し、回転糸切痕が残る。体部下半は内湾する形態と思われる。復元底径5.9cmを測る。

123は土坑142から出土した土製煮炊具で、口縁は「く」字状に屈曲する形態と思われる。口縁端部を内側に少し拡張する。

124は遺構145から出土した土師器皿で、体部上半は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.2cmを測る。

125は遺構158から出土した。紀伊型の羽釜(註1)と思われ、口縁は「く」字状に屈曲し、端部に面をつくり、外側に拡張する。断面三角形の低い鈔が付く。

126は窪地状の遺構161から出土した。播磨型の羽釜形タイプ土製煮炊具(註1)と思われる。

127は遺構167から出土した。土師器小皿と思われ、底部外面に回転糸切痕が残る。体部は内湾する形態と思われ、器壁が薄い。復元底径5.2cmを測る。

128は遺構55から出土した鉄製品で、釘の頭部と思われる。

129は遺構130から出土した鉄製品で、鎌等の一部と思われる。

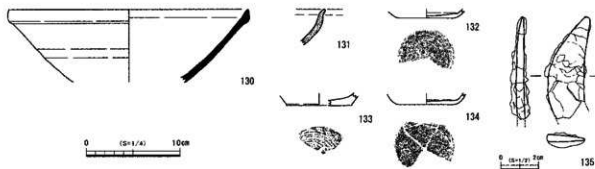


図28 4地区 包含層出土遺物

(2) 包含層出土遺物 (図28、写真図版16)

130は東播系須恵器鉢で、体部は少し内湾する。口縁端部を下方に少し拡張し、口縁内側の凹みはほとんど見られない。復元口径25.3cmを測る。

131は天目茶碗の体部片である。体部は内湾し、口縁部を外側に屈曲させる。口縁端部を尖り気味におさめる。

132~134は土師器皿と思われ、底部外面に回転糸切痕が残る。132・134は体部下半が内湾し、133は直線的である。132は底径6.2cm、133は復元底径6.9cm、134は底径6.3cmを測る。

135は鉄製品で、鎌等の先端部と思われる。

第3章の註

- 岡田淳一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県歴史文化財研究紀要 第3号』兵庫県教育委員会歴史文化財調査事務所 2003
- 渋谷高秀「和泉国における土器の生産と流通—中世における伊藤・煮湯形態を中心として—」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会 1989

第4章 総括

第1節 供膳具の分類と時期について

第2節で遺構の時期の検討を行う前に、出土遺物の大半を占める供膳具の分類と時期の整理を行う必要がある。三原平野周辺の同時期の遺跡として、これまでに谷町筋遺跡(註1)で土師器(埴)皿類の分類と時期的な変化が述べられたのを先鞭として、高萩遺跡(註2)・久保ノカチ遺跡(1～3次調査)(註3)で土師器皿・小皿の時期による法量の変化が取り上げられているが、今回の資料の増加により再検討の必要が生じてきた(註4)。同じ賀集福井に属する久保ノカチ・高萩遺跡を中心に、時期のわかる他の遺跡を適宜補うことにより検討を行いたい(註5)。まず土師器皿について形態・調整・焼成上の特長から大きくa～c類に分類し、さらに時期(0～4期)の変化を追うことにしたい(註6)。最初にa～c類の違いを端的に述べておくと、粗製で浅いa類、精製で浅いb類、粗製で深いc類ということになり、全体的な傾向としてはより浅く開く器形へと変化していく。(図29参照)

a類 体部が内湾し、b類のように体部内面に段状のナデ痕が見られない。ただし体部外面には段状のナデを残すものも存在する。同時期の須恵器皿がほぼ同じ技法でつくられていることから、これを須恵器皿a類とした。

0期 底体部共に器壁が厚く、器壁を薄く仕上げるという意識が見られない段階である。口縁端部を丸くおさめる。灰白色を基本に黄橙色の色調を呈するものが含まれ、おおよそ焼成は良好である。

1期 口縁部付近に強いナデを施すのが特長である。口縁部のみ薄くなるもの、外反するものや直口気味になるもの等、口縁部の形態は多様で過渡期的な様相を呈す。口縁端部は丸くおさめるものと尖り気味になるものが見られる。底部の厚みについてはa類0期(以後a0)から大きな変化は無い。2期と同じような色調(黄橙～赤色)であるが、焼成は2期より良好である。

2期 体部から底部にかけて強いナデを施すことで、器壁を薄く仕上げたと思われる。口縁端部も尖り気味のものが多くを占めるようになる。体部は緩やかに内湾する形態に均一化されていくようである。黄橙～赤色を呈し、焼成は不良である。

3期 体部が緩やかに内湾する形態はa2同様で、口縁端部は尖り気味である。2期より器壁が厚く、特に底部を薄くする意識が無くなっている。黄橙～赤色を呈し、焼成は不良である。

4期 体部が緩やかに内湾する。口縁端部は尖り気味のものに加えて、丸く納めるもの、外側に面をもつものなど多様な展開を示し、さらに細かい分類が可能であろう。焼成も3期のように不良なものから、白っぽい良好なものまで多様である。

b類 a類同様、体部が内湾するが、a類との違いは底体部内面に段状のナデ痕が多く残り、特に底部の器壁が薄い。須恵器に同じ調整痕を残すものは確認していない。また同時期のa・c類と比べて、精緻な胎土で焼成が良好なものが多い。

0期 今のところ該当する遺物は確認できていない。

1期 体部が内湾し、口縁部を直口気味に丸くおさめるもの(b1-1・2)を確認している。a1・c1との大きな違いは焼成が良好なことと全体に器壁が薄いことである。

2期 a類同様、体部が緩やかに内湾する形態に、均一化が進むと推定される。口縁端部は尖り気味

で、焼成も良好である。(註7)

3期 2期から、形態や器壁の薄さに大きな変化は無い。口縁端部は尖り気味である。a 3と比較して白っぽい色調で焼成は良好、精緻な胎土である。

4期 3期と比べ、体部が直線的で、特に底部の器壁が厚くなる。口縁端部は尖り気味のものが多いが、一部外側に面をもつものが現れる。焼成は3期より悪くなっているが、胎土は精緻である。

c類 体部が直線的で坏の系譜上に位置付けられる。特に2・3期においてa・b類よりも外傾係数が大きく、体部が急角度で立ち上がり、器高が高いもの多く見られる(図35参照)。体部内外面に段状のナデ痕を施すものも存在するが、b類よりも粗く、底部内面まで及んでいるものは見当たらない。焼成はa類とほぼ同様の経過を示す。

0期 体部は直線的なものと外反するものが見られる。口縁端部に強いナデを施さず、丸くおさめる。

a 0同様、全体に器壁は厚く、焼成も良好である。

1期 口縁端部に強いナデを施し、体部中位を肥厚したように見えるものが多い。口縁端部も尖り気味のものが多くなる。黄橙～赤色を呈し、焼成の良いものと悪いものが混在する。

2期 体部中位の肥厚が無くなり、底体部共に薄く仕上げる。口縁端部は尖り気味である。色調は黄橙色で焼成は悪い。

3期 a類同様、2期に薄くなっていた器壁が、体部下半～底部にやや厚いものが含まれるようになる。(註8)

4期 口縁端部外側に面を持つ。3期以前と比較して段状のナデ痕が目立ち、b類とほぼ同様の調整である。焼成はa類同様、白っぽい良好なものから赤っぽい不良なものまで多様である。

0期は久保ノカチ・高萩遺跡に良好な遺物は出土しておらず、両遺跡の中心時期からは外れる。九蔵遺跡建物4・5柱穴出土a 0-1、須恵器皿a 0(以後須a 0)-1、c 0-1・2(註9)は和泉型瓦器塊の橋本編年Ⅲ-3期頃(13世紀中～後葉)(註10)、九蔵遺跡遺構9・10a出土のa 0-2、須a 0-2・3(註11)はそれぞれ橋本編年Ⅳ期頃(13世紀末～14世紀前葉)と思われる高台の消失した瓦器塊を伴出しており、0期を14世紀前葉以前とする。これらよりさらに古い11世紀後半～13世紀前半の鉦田遺跡溝SSD-3(註12)からもa 0とc 0の祖形となるような土師器が出土しているが、出土量はc 0がa 0をはるかに上回り、実測可能な須恵器皿(塊)は出土していない。整理すると須恵器皿(塊)は13世紀前半頃までは流通量が非常に少なかったが、橋本編年Ⅳ期頃の瓦器塊の減少を起因として、増加に転じた可能性が高い。さらに増加した須恵器皿a 0の技法の影響を受けた土師器皿a 0も流通量を増やし、a 1に至ってc 1を上回ると推定される。法量の変化については、鉦田遺跡溝SSD-3の土師器坏(c 0)の口径が13.1～15.6cmと報告されていることから、次第に口径・底径の縮小化が進んでいくと推定される。須a 0とa 0についても同じ経過を辿ると思われる。b 0は今のところ確認例が無く、b類がいつ、どのように成立したかは不明である。

1期の特徴を端的に言うならば、口縁部を中心に体部を薄く仕上げようという意識が表れてくる時期で、口縁部に強いナデを施すことによって器壁を薄く仕上げる須恵器皿a 1の製作技法が土師器に影響を与えた可能性が高い。b 1は口縁部のみでなく全体を薄く仕上げており、a 1、c 1と比べて焼成が良好で、精製の土師器皿という特徴が最も明確な時期である。高萩遺跡建物1柱穴出土のa 1-7、b 1-1、c 1(註13)、久保ノカチ遺跡SK69出土のa 1-2、c 1-5、谷町筋遺跡土坑20出土のa 1

-8~10、須a1-2・3、b1-2、溝357(本報告分は遺跡名省略)出土のc1-1~4、須a1-1が伴関係にある。久保ノカチ・高萩遺跡での出土量はa1>c1>b1となる。谷町筋遺跡土坑20が東播系須恵器鉢から14世紀中~後葉頃と推定されており、2期が後述のように15世紀初頭からと推定されることから、1期を14世紀中葉~末とした(註6)。

2期は須a2の出土を確認しておらず、谷町筋遺跡でもIV期(15世紀前~中葉)以降の遺構からの須恵器埴皿類の出土は無いと報告されていることから、須恵器皿は1期中に減少に転じ、2期中には消滅したと推定される。2期はa~c類全てにおいて最も器壁が薄く仕上げられ、口縁部のみでなく底部を含めて全体に器壁が薄く、口縁端部を尖り気味におさめるものがほとんどである。a1は体部の形態が多様であるが、a2には緩やかに内湾するものに均一化していくと考えられる(註7)。a2は口径・底径は大きくなる傾向が見られるが、寺中遺跡では口径の小さいa2-4~6と大きいa2-7~12にわかれるようである。器高については、久保ノカチ・高萩遺跡は高く、寺中遺跡は低いことから、地域差の可能性も考えられる。b2は法量の明らかなものが無いが、叶堂城跡瓦窯出土遺物中にa2、c2とともに出土しており(註8)、これらを参考とすると、緩やかに内湾する形態はa2と共通する。c2はc1で観察された体部中位と底部の厚みが無くなり、均一な薄い仕上がりになっている。c1からc2にかけての法量的な変化は少ないが、a・b類と比較して深い器形という特徴が鮮明になる。時期については、久保ノカチ遺跡SK45出土c2-1(註9)、寺中遺跡溝15出土a2-4~12、c2-2・3(註10)、上記叶堂城跡瓦窯出土遺物等、兵庫津遺跡V期(15世紀前半~中頃)(註11)と思われる土製煮炊具が伴する例が多く確認される。3期が15世紀中葉からと推定されるため、2期は15世紀初頭~前葉とした。

3期になると特にa・c類で2期と比べて体部下半~底部に若干厚みが観察できるものがあり、器壁を薄くする工程が再び省略されていくと推定される。a3はa2で見られた器高の地域差が解消している。地鎮等の祭祀関係と思われる高萩遺跡遺構18はa3-1~3とb3-1・2が交互に積み重ねられる形で伴しており、a・b類の違いを明確に意識して祭祀に用いている事例である。c3は久保ノカチ・高萩遺跡からは出土していないが、寺中遺跡土坑4に体部が直線的なものとして報告されているc3-1~9がこれに該当すると思われ、体部が内湾するa3-8~11、兵庫津遺跡VI期(15世紀後半~16世紀初頭)の土製煮炊具が伴する。その他、谷町筋遺跡土坑24出土のa3-4~7は15世紀中~後葉、高萩遺跡遺構18が15世紀中葉頃と推定されている。後述するように4期が15世紀末からと推定されるため、3期は15世紀中~後葉とした。

4期にはa~c類全てにおいて、器壁が厚くなり、器高は低くなって浅く開く形態となっていく。c4については深い器形という特徴が見られなくなり、またb類と同様に多條化したナデ痕を残すものも見られる。その一方でb4は焼成が悪くなり、精製の土師器という特徴が失われつつある。a~c類それぞれの特徴や機能が失われつつある段階と言えることができる。一方ではa~c類の系譜では捉え難い器形も存在し、島外から新しい器形が搬入された可能性も考えられる。時期としては、久保ノカチ遺跡4区SB2から兵庫津遺跡VI期(15世紀後半~16世紀初頭)の土製煮炊具と伴出したb4-7は、明らかにb3-1・2より器高が低く、器壁が厚いことから、後出する段階と考えて15世紀末~16世紀初頭と推定する。ただしこれ以外のものは下限が明らかでないものも含まれているため、15世紀末以降とした。

次に土師器小皿についてであるが、分類を行うために必要な資料が不足しているため、概観を述べるのみにとどめたい(註12)。0期(13世紀中~後葉)の口縁部は、外反するもの(0-15・16・18)、直線

的なもの(0-3~5・10・11・13)、内湾するもの(0-1・2・6~9・12・14・17)に分類可能であるが、2期以降はほとんどが内湾する形態となる。口縁端部については、各時期共、丸くおさめるもの、尖り気味におさめるものが見られるが、1-1・3~7、2-1・3等、1期以降、次第に尖り気味が主体となっていく。また1-9、2-1・2・4(凹)・9は器壁が薄く、土師器皿a~c類と同じような変化が小皿にも見られる。法量については時期を下るにしたがって浅く開く器形に変化し、縮小化が進むと考えられるが、2期は口径の大きいタイプと小さいタイプが見られる。上久保遺跡(凹)遺構43(4-1・2)では大小の共伴を確認している。3-1~5は口径の大きいタイプと推定され、3期は小さいタイプの出土例が今のところ確認できていない。これらの口縁部の形態や法量の違いにより、将来的には分類が可能と思われる。



























		須恵器皿 a類	土師器皿 a類	土師器皿 b類	土師器皿 c類	土師器小皿
0期	13c中 後葉	 須a0-1	 a0-1	?	 c0-2	 0-1  0-5
	13c末 14c前葉	 須a0-2	 a0-2	?	↓	↓
1期	14c中葉 末	 須a1-1	 a1-6	 b1-1	 c1-2	 1-1  1-8
2期	15c初頭 前葉	?	 a2-2	↓	 c2-1	 2-3 (口径の小さいタイプ)  2-4 (口径の大きいタイプ)
3期	15c中 後葉		 a3-1	 b3-2	↓	↓
4期	15c末		 a4-1	 b4-2  b4-9	 c4-1  c4-3	 4-1 (口径の小さいタイプ)  4-2 (口径の大きいタイプ)

図29 中世の供膳具(S=1/8)

分類番号	遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量			外傾係数	時期・共存土器 (注)注量不明	
				口径	底径	器高			
a0	-1	九蔵	C-2・3地区建物4	43	11.2	6.3	3.5	1.49	13C中～後葉、須a0、 c0、小皿0
	-2	九蔵	B-2地区遺構10a	10	11.3	7.2	3.0	1.18	13C末～14C前葉、(須 a0)
				平均值	11.8	6.9	3.3	1.33	～14C前葉
a1	-1	久保ノカチ	4地区遺構35	109	12.0	6.4	3.5	1.25	小皿1
	-2	久保ノカチ	1～3次8区SK69	112	10.8	7.8	2.7	1.69	c1
	-3			61	11.6	7.2	3.0	1.36	
	-4	久保ノカチ	1～3次5区SK4	62	11.6	6.3	3.0	1.11	13C後半～14C中頃
	-5			63	11.5	7.0	3.0	1.33	
				平均值	11.6	6.8	3.0	1.27	
	-6	高萩	C-2地区土坑1	98	12.2	6.5	3.3	1.16	14C後葉
	-7	高萩	C-1地区建物1	33	12.0	6.3	3.0	1.05	14C末～15C初頭、b1・ (c1)
	-8			826	11.5	5.7	3.0	0.98	
	-9	谷町筋	北地区土坑20	831	11.5	6.1	3.5	1.23	14C中～後葉、須a1、 b1、小皿1
-10			833	12.2	6.2	3.7	1.23		
			平均值	11.9	6.0	3.4	1.15		
			平均值	11.8	6.5	3.2	1.24	14C中葉～末	
a2	-1	久保ノカチ	2地区土坑70・71	48	12.7	7.0	3.0	1.05	(c2)、小皿2
	-2			49	12.6	6.7	3.6	1.22	
				平均值	12.7	6.9	3.3	1.14	
	-3	久保ノカチ	4地区遺構84	118	11.8	7.0	3.4	1.42	(c2)
	-4			194	11.2	4.3	2.8	0.88	15C前半、c2、小皿2
	-5			195	10.9	6.7	2.3	0.98	
	-6			196	11.5	4.3	2.7	0.81	
	-7			197	12.4	7.1	2.4	0.91	
	-8			198	13.4	7.9	2.5	0.91	
	-9	寺中	溝15	199	13.0	6.0	2.3	0.92	
	-10			200	13.1	7.0	2.3	0.75	
	-11			203	13.6	6.9	2.6	1.12	
-12			205	12.7	7.2	2.7	1.02		
			平均值	12.3	6.8	2.5	0.92		
			平均值	12.3	6.8	2.7	1.00	15C初頭～前葉	
a3	-1	高萩	C-2地区遺構18	93	12.0	7.3	2.4	1.02	15C中葉・b3
	-2			95	11.7	6.7	2.4	0.96	
	-3			97	12.7	7.2	2.1	0.71	
				平均值	12.3	7.1	2.3	0.90	
	-4			903	12.4	6.1	2.6	0.83	15C中～後葉、小皿3
	-5			904	12.3	6.0	2.5	0.79	
	-6	谷町筋	南地区土坑24	905	12.5	7.3	2.2	0.80	
	-7			906	12.5	6.9	2.5	0.89	
				平均值	12.5	6.6	2.5	0.83	
	-8			174	12.8	6.5	2.3	0.78	15C後半～16C初頭、c3
	-9			175	13.5	7.0	2.3	0.71	
-10	寺中	土坑4	176	12.9	7.7	2.3	0.88		
-11			178	13.5	8.2	3.2	1.21		
			平均值	13.2	7.5	2.5	0.89		
			平均值	12.7	7.0	2.4	0.87	15C中～後葉	
a4	-1	久保ノカチ	1～3次8区SK3	101	11.0	4.9	2.1	0.69	15C中～16C前半
	-2			890	12.0	5.9	2.5	0.82	
	-3	谷町筋	東地区建物10	891	11.5	5.1	2.4	0.72	15C末～16C前葉
				平均值	11.9	5.5	2.5	0.77	
			平均值	11.6	5.3	2.3	0.74	15C末～	

表1 土器器皿a類の法量 *網掛けは推定値を示す

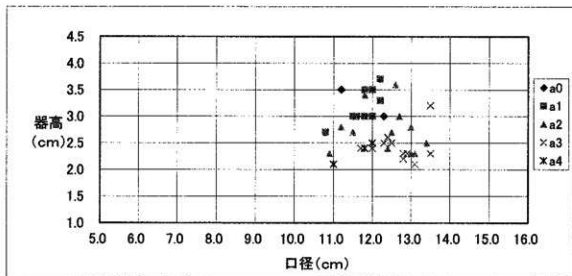


図30 土師器皿a類の法量分布

分類番号	遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量			外傾係数	時期・共存土器	
				口径	底径	器高			
須 a0	-1	九蔵	C-2・3地区建物4	31	11.8	6.5	4.2	1.04	13C中～後葉、a0、c0、小皿0
	-2	九蔵	B-2地区遺構9	1	12.9	7.2	3.1	1.09	13C末～14C前葉
	-3			2	12.0	6.5	2.9	1.05	
	平均値			12.5	6.9	3.0	1.07		
平均値	13.2	6.7	3.4	1.06	～14C前葉				
須 a1	-1	久保ノ力子	2地区溝357	36	11.8	5.9	3.0	1.05	14C中～後葉、a1、b1、小皿1
	-2	谷町筋	北地区土坑20	836	11.0	6.8	2.2	1.05	14C中～後葉、a1、b1、小皿1
	-3			837	12.8	6.7	2.8	0.90	
	平均値			12.0	6.8	2.5	0.98		
平均値	11.8	6.5	2.7	1.00	14C中葉～末				

表2 須恵器皿a類の法量 *網掛けは推定値を示す

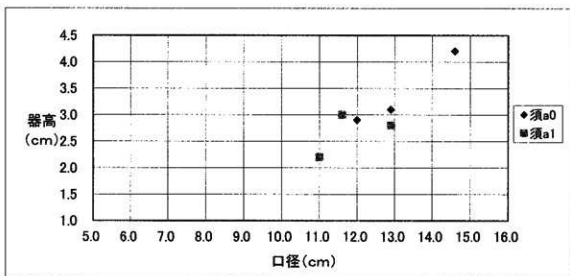


図31 須恵器皿a類の法量分布

分類番号	遺跡名	出土遺構	遺物 番号	法量			外傾係数	時期・共伴土器 (注)は法量不明	
				口径	底径	器高			
b1	-1	高萩	C-1地区建物1	34	12.6	7.0	2.8	1.00	14C末~15C初. a1. (c1)
	-2	谷町筋	北地区土坑20	832	11.8	6.5	3.7	1.40	14C中~後葉. a1. 項a1. 小皿1
				平均値	12.2	6.8	3.3	1.20	14C中葉~末
b3	-1	高萩	C-2地区遺構18	94	12.3	5.9	2.7	0.84	15世紀中葉. a3
	-2			96	12.1	6.0	2.6	0.85	
				平均値	12.2	6.0	2.7	0.85	
b4	-1	久保ノカチ	1~3次7区P51	86	12.0	6.0	2.2	0.73	15C中~16C前半
	-2			87	11.2	7.0	2.3	0.74	
	-3			88	12.4	5.8	2.3	0.68	
	-4			89	12.0	6.2	2.1	0.72	
	-5			90	13.0	6.8	2.7	0.84	
	-6			91	12.2	6.0	2.6	0.84	
				平均値	12.5	6.2	2.4	0.76	
	-7	久保ノカチ	1~3次4区SB2	33	11.6	6.0	1.8	0.64	15C中~16C前半
	-8	久保ノカチ	1~3次7区SB2	80	12.2	6.0	2.0	0.65	15C中~16C前半
	-9	上久保(註22)	B地区遺構164	8	11.9	6.1	2.4	0.83	c4
	-10	上久保 (註22)	B地区遺構44	3	12.1	5.5	2.2	0.67	
	-11			4	11.6	5.5	2.2	0.72	
	-12			5	13.2	5.2	2.5	0.63	
-13	6			12.3	5.4	2.5	0.72		
			平均値	12.3	5.4	2.4	0.69		
			平均値	12.3	5.9	2.3	0.72	15C末~	

表3 土師器皿b類の法量 * 網掛けは推定値を示す

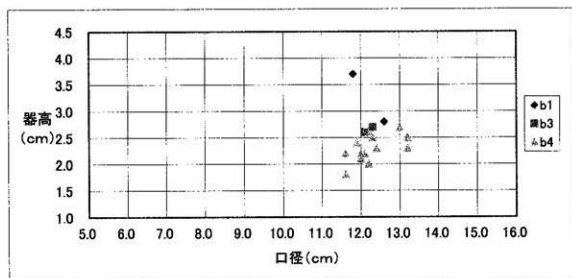


図32 土師器皿b類の法量分布

分類番号	遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量			外傾係数	時期・共伴土器
				口径	底径	器高		
c0	九蔵	O-2・3地区建物4	42	14.5	8.3	2.9	0.92	13C中～後半、a0、須 a0、小皿0
			59	14.1	8.1	3.9	1.30	
			平均値	14.4	8.2	3.4	1.11	
c1	久保ノカチ	2地区溝357	24	12.3	6.7	3.8	1.36	須a1、小皿1
			25	11.2	6.3	3.7	1.51	
			26	12.3	6.5	3.5	1.21	
			27	11.6	6.6	3.0	1.20	
			平均値	11.9	6.5	3.5	1.32	
-5	久保ノカチ	1～3次8区SK69	111	11.6	6.8	2.7	1.13	a1
平均値	11.8	6.8	3.3	1.28	14C中葉～末			
c2	久保ノカチ	1～3次3区SK45	17	11.8	6.8	3.3	1.32	15C前半～16C初頭
			202	12.4	6.0	3.0	1.36	
			204	12.2	6.5	3.1	1.09	
			平均値	12.3	7.3	3.1	1.23	
平均値	12.1	7.1	3.1	1.26	15C初頭～前半葉			
c3	寺中	土坑4	177	13.4	7.2	3.0	0.97	15C後半～16C初頭、a3
			179	12.6	7.3	2.7	1.02	
			180	12.6	8.0	2.7	1.17	
			181	12.3	7.9	3.1	1.41	
			182	12.3	7.5	3.2	1.33	
			183	12.2	7.7	3.1	1.22	
			184	12.7	7.2	3.1	1.13	
			185	12.6	7.7	2.8	1.14	
			186	12.3	7.1	2.9	1.12	
			平均値	12.6	7.4	3.0	1.17	
c4	上久保	B地区遺構184	9	14.2	7.4	2.9	0.85	b4
			P66左下	11.6	6.3	2.2	0.83	
	生ヶ坂 (註22)	遺構35	P66右下	12.0	6.0	1.8	0.60	
			平均値	11.8	6.2	2.0	0.72	
			平均値	12.6	6.6	2.3	0.76	15C末～

表4 土師器皿c類の法量 *網掛けは推定値を示す

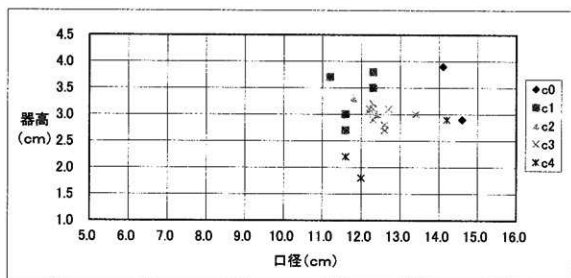


図33 土師器皿c類の法量分布

時期	番号	遺跡名	出土遺構	遺物 番号	法量			外傾係数	時期・相伴土器 *注は法量不明	
					口径	底径	器高			
0	-1	九蔵	C-2・3地区建物4	24	8.1	5.5	1.5	1.15	13C中～後葉、a0、 須a0、c0	
	-2			25	8.5	6.0	1.5	1.58		
	-3			28	9.4	5.5	1.8	1.29		
	-4			32	7.3	5.9	0.9	1.29		
	-5			33	8.1	5.8	1.6	1.39		
	-6			41	9.3	7.3	1.1	1.10		
	-7			46	9.8	6.1	1.8	1.33		
	-8			47	7.2	5.2	1.5	2.14		
	-9			48	7.8	5.6	1.4	1.27		
	-10			平均值	8.2	6.0	1.5	1.39		
	-11			53	8.4	6.2	1.2	1.09		
	-12			54	8.4	6.3	1.7	2.27		
	-13			55	10.5	7.4	1.6	1.23		
	-14			57	8.4	6.0	1.4	1.47		
	-15			58	8.1	6.2	1.2	1.26		
	-16			61	9.0	7.0	1.7	1.36		
	-17			62	7.9	5.5	1.6	1.33		
	-18			63	8.8	6.4	1.6	1.45		
		64	8.4	7.2	1.5	2.50				
		平均值	8.6	6.6	1.5	1.55				
		平均值	8.4	6.3	1.5	1.47	～14C前葉			
1	-1	久保ノカチ	2地区溝357	28	7.1	5.6	1.2	1.60	須a1、c1	
	-2			29	7.4	5.3	1.2	1.14		
	-3			30	7.4	5.8	1.3	1.63		
	-4			31	8.2	5.4	1.1	1.47		
	-5			20	7.4	6.0	1.1	1.57		
	-6		21	7.3	5.3	1.4	1.87			
			2地区溝332	21	7.3	5.3	1.4	1.87		
			平均值	7.4	5.9	1.3	1.72			
	-7		久保ノカチ	4地区遺構35	111	6.9	5.3	1.1		1.38
	-8				112	7.4	5.3	1.2		1.14
		平均值	7.2	5.3	1.2	1.26	a1			
-9	谷町筋	北地区土坑20	825	7.8	5.6	1.2	1.20	14C中～後葉、a1、 須a1、b1		
		平均值	7.3	5.6	1.2	1.44	14C中葉～末			
2	-1	高萩	C-2地区流路38	105	6.2	5.0	1.0	1.67	15世紀前半	
	-2			106	8.2	4.9	1.0	1.54		
				平均值	6.2	5.0	1.0	1.61		
	-3	久保ノカチ	2地区欄列2	18	6.7	5.2	0.9	2.00		
			口径の小さいタイプ	平均值	6.2	5.0	1.0	1.74		15C初頭～前葉
	-4	久保ノカチ	2地区土坑70・71	53	7.1	4.7	1.7	1.42		a2、(c2)
	-5	森(註2)	ビット5	117	6.9	4.7	1.0	0.91		15C前半、(a2)
	-6			118	6.5	4.5	1.0	1.00		
	-7			119	6.9	5.0	0.9	0.95		
	-8			120	7.2	4.3	1.4	0.97		
	平均值			6.9	4.6	1.1	0.96			
-9	寺中	溝15	193	7.3	5.9	1.0	1.05	15C前半、a2、c2		
		口径の大きいタイプ	平均值	7.1	4.9	1.2	1.05	15C初頭～前葉		
3	-1	谷町筋	南地区土坑24	898	6.8	4.0	1.2	0.86	15C中～後葉、a3	
	-2			899	6.6	5.1	0.8	1.07		
	-3			900	6.8	5.0	1.0	1.11		
	-4			901	6.4	4.8	1.0	1.25		
	-5			902	7.0	5.1	1.0	1.05		
				平均值	6.7	4.8	1.0	1.07		15C中～後葉
4	-1	上久保	B地区柱穴43	1	6.8	5.1	0.9	1.06	15C末～	
	-2			2	9.5	5.3	2.1	1.00		

表5 土師器小皿の法量 *網掛けは推定値を示す

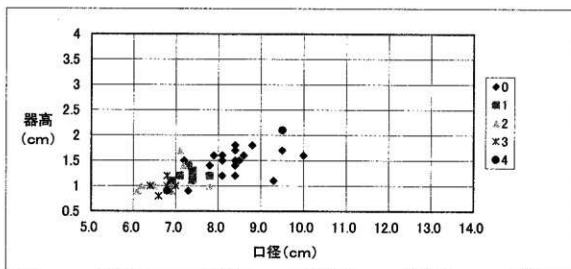


図34 土師器小皿の法量分布

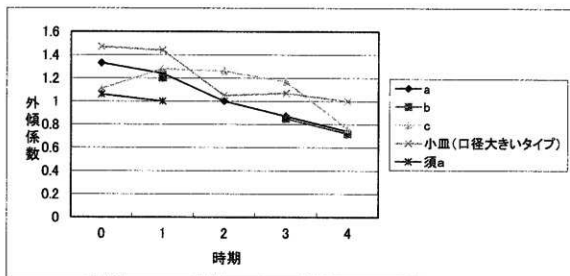


図35 外傾係数の変化

第2節 遺構の変遷と時期について

最初に遺構の変遷について第3章で述べた事をまとめておく。[] 内は当節で述べる。

- ①切り合いから新旧が明らかな遺構 建物4→建物5→土坑70・71〔出土遺物は1～2期〕
- ②方位がほぼ一致し、同時期もしくは前後する時期と思われる遺構
- ㊦建物4 (N81° W) = 柵列1 (N11° E) [=] 溝357・332 (N12° E) [1期]
 - 建物5 (N81° W) = 柵列2 (N11° E) [=] 溝320 (N12° E) [2期]
 - ㊧建物3 (N6° E) = 柵列3 (N85° W) = 柵列4 (N6° E) [2～3期]
 - 建物7 (N86° W) = 柵列5 (N88° W)、建物6 (N87° W) [3期]
 - ㊨建物8 (N4° W) = 柵列6 (N4° W) [3～4期]
 - ㊩建物1 (N67° W)、建物2 (N73° W)、溝157 (N65° W) [1～2期]

次に出土遺物から時期の検討を行いたい。

まず①および②の建物4・5柱穴出土遺物であるが、東播系須恵器鉢6・13は口縁端部を内側斜め上方に肥厚しており、兵庫津遺跡では15世紀前半の遺構から多く出土するとされるE2類と似た形態である。土師器小皿15は1ないし2期で、14世紀中葉～15世紀前半の建物と推定される。溝357出土の土師器皿24～27(c1-1～4)、須恵器皿36(須a1-1)は第1節で述べたように14世紀中葉～末と推定される。溝357出土土師器小皿28～31(1-1～4)と溝332出土20・21(1-5・6)は、形態・法量が似ており、共に1期と思われる。欄列2の土師器小皿18(2-3)はやや法量が小さく2期と推定される。溝320の上製煮炊具19は鈿部が欠損しているが、兵庫津遺跡のV～VI期(15世紀前半～16世紀初頭)に現れる。整理すると①の中でも14世紀中葉～末の溝357・332に対応して建物4・欄列1が先行し、溝320・建物5・欄列2が後続し、15世紀初頭～前葉頃と考える。

次に①の土坑70・71の出土遺物である。備前焼大甕40～42・44・45の口縁部は折り返して玉縁状に仕上げ、楕円形に近い形状を呈することから、重根編年IVA期(14世紀前葉から15世紀中葉)⑤⑥と思われる。ただし折り返しの長い40・44・45とやや短い41・42は時期差を有する可能性も考えられる。43は須恵質の焼成であるが、口縁部の特徴が河内・和泉型瓦質焼成土器甕の鋤柄編年A-II-2類⑦⑧に似ており、15世紀を前後する時期と思われる。54の東播系の鉢は口縁端部外縁が突出する形状が兵庫津遺跡のD類(14世紀前半～15世紀前半)に似る。土師器皿48・49(a2-1・2)と土師器小皿53(2-4)は2期、52は1ないし2期と思われる。56の刺花文の青磁碗は小片で流れ込みの可能性もあるため、他の遺物と時期が合わないことに問題は無い。したがって全体としては14世紀中葉～15世紀前葉の②③とほぼ重なる時期である。備前焼大甕の大量出土も一般集落的でないことから、規模が大きい建物4・5と関係する遺物の可能性は非常に大きい。2期の建物5廃絶後、整地を行う際、廃棄物を埋めた土坑と考えておきたい。

次に②の出土遺物が少ないが、建物3柱穴249出土土師器皿2はa2に対応し、15世紀初頭以降と思われる。①の中で、建物3・欄列3・4については⑦と重ならず、⑦と建物6・7・欄列5の中間的な方位を示すことから、建物5と併存したと考えることも可能である。ただし建物6・7と欄列5は、建物5と位置が重なることから建物5の廃絶後に建てられたと推測され、⑦→⑧の順で推移すると考えられる。建物6・7は3期と考えるが、どちらが先行するかについては不明である。

⑨は出土遺物が無いが、建物規模が極めて大きい⑨の前ではなく、建物規模が次第に縮小していく流れから⑨の後とする方が自然と思われ、3～4期としておく。

⑩～⑪は同一の屋敷地であるが、⑩は別の屋敷地である。⑩の遺構群からは時期を判断できる遺物は出土していないが、建物1・2の柱穴を切る遺構84の出土遺物が118(a2-3)・119・120(c2)等、2期の遺物が中心であることから2期以前と判断され、遺構35出土遺物109(a1-1)・111・112(小皿1-7・8)や遺構145の124(c1)等、建物周辺の遺構は1期が中心と思われることから、⑩は1～2期として⑦と並行する時期と考えておきたい。

最後に2地区の土坑70・71以外の大型の土坑群についてであるが、土坑69出土58(小皿2)、土坑208出土60(小皿2)・61(c2)、土坑277出土77(a2)など、最も新しい時期で2期と思われる遺物が出土しているが、小さな破片が多く土坑埋土に混入した可能性も考えられることから、詳しい時期や性格については不明である。

第3節 建物群と遺跡の性格について

まず最初に建物群で最大規模の建物4・5の性格について考えたい。南あわじ市域におけるほぼ同時期の建物として、高萩遺跡建物1・3、谷町筋遺跡建物1・4・11が各々の集落を代表する規模と言える。それらの建物の特徴として、①母屋部分の床面積で約25㎡以上、廂を含めた総床面積が約45㎡以上の突出した規模となる。②3ないし4面の廂を備え、孫廂を備えるものもある。③母屋部分が総柱構造を備える割合が高い。以上の3点が指摘できる。

これらの建物の階級については、谷町筋遺跡では建物4を含めた屋敷地を郷村指導者層（有力名主や侍衆）と推定し^{〔註1〕}、高萩遺跡建物1は国人（久米氏）ないし国人の下で開発を行ってきた（指導する立場にあった）者の住居と推定している^{〔註2〕}。久保ノカチ遺跡建物4・5の屋敷主についても、これらの建物と同じような階級であることは間違いない。

次に文書関係に目を向けてみたい。江戸時代の地誌『味地草』によると、福井村は「往古は二村にして法華寺村高萩村と云」とされており、後述する中世文書にも「法花寺村」が明記されている。久保ノカチ遺跡周辺は中世に「法花（華）寺村」と呼ばれ、「高萩村」とは別の村であったことがわかる。さらに調査地

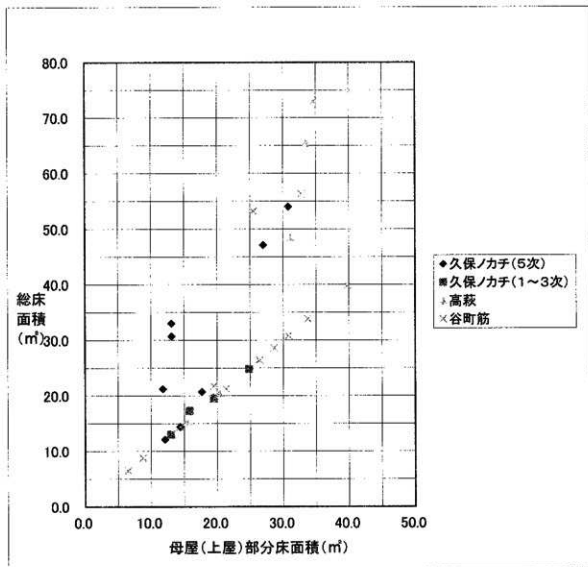


図36 中世建物の床面積分布

遺跡	遺構	母屋(上屋)部分					廂(下屋)部分		総床面積(m ²)	柱構造	方位 (東北基準のもの は方位角として 括弧内に 修正)	時期
		梁間		桁行		床面積 (m ²)	床面積(m ²)					
		規模(m)	間数	規模(m)	間数							
久保ノ 力子(5 次)	建物1	3.1	1	4.2	2	13.1	17.6(2面)	30.7	側柱	N74° W	1~2期	
	建物2	3.0	1	4.2	2	13.1	19.9(2面)	33.0	側柱	N80° W	1~2期	
	建物3	3.3	1	3.6	2	11.8	9.4(2面)	21.2	側柱	N1° W	2~3期	
	建物4	4.8	2	6.3	3	30.8	23.2(3面)	54.0	総柱	N88° W	1期	
	建物5	4.3	2	6.4	3	27.0	20.1(3面)	47.1	総柱	N88° W	2期	
	建物6	3.3	2	4.2	3	14.4	0	14.4	側柱	N88° E	3期	
	建物7	3.1	2	5.8	3	17.7	3.0(1面)	20.7	側柱	N87° E	3期	
	建物8	2.2	1	5.3	3	12.1	0	12.1	側柱	N11° W	3~4期	
久保ノ 力子(1 ~3次) (註26)	3区SB1	3.3	1	5.9	2	19.5	0	19.5	側柱	N8° E	0~1期	
	4区SB2	3.5	2	3.7	2	13.0	0	13.0	総柱	N47° W	4期	
	4区SB3	3.5	2	7.2	4	24.8	0	24.8	側柱	N44° W	4期	
	5区SB1	3.0	1	5.4	3	15.8	1.5(1面)	17.3	側柱	N14° E	1期	
高萩 (註27)	建物1	4.8	2	6.7	3	33.5	31.9(4面+孫)	65.4	総柱	N12° W	1期	
	建物2	3.7	2	5.6	4	20.4	0	20.4	一部総柱	N69° E	2期	
	建物3	5.1	2	5.9	3	31.1	17.4(3面)	48.5	側柱	N27° E	3期	
	建物4	3.4	2	4.5	2	15.4	0	15.4	側柱	N80° W	2期	
谷町筋 (註28)	建物1	3.9	2	8.4	5	32.8	23.5(4面)	56.3	側柱	N9° E	15C前~中葉	
	建物2	5.3	2	7.5	3	39.8	0	39.8	総柱	N66° W	15C前~中葉	
	建物3	4.6	2	7.5	3	33.8	0	33.8	側柱	N72° W	14C後葉~15C初	
	建物4	4.8	2	7.2	5	34.6	38.3(3面+孫)	72.9	一部総柱	N17° E	14C後葉~15C初	
	建物5	1.9	1	7.6	4	14.4	0	14.4	側柱	N15° E	14C後葉~15C初	
	建物6	2.2	1	4.4	2	8.8	0	8.8	側柱	N17° E	14C後葉~15C初	
	建物7	4.8	3	5.5	2	26.4	0	26.4	側柱	N87° W	15C前~中葉	
	建物8	4.4	2	7.0	3	30.8	? (1面)	?	側柱	N26° E	15C前~中葉	
	建物9	2.1	1	9.2	4	19.5	2.2(1面)	21.7	側柱	N12° E	15C前~中葉	
	建物10	1.5	1	4.3	2	6.5	0	6.5	側柱	N45° W	15C後~16C前葉	
	建物11	3.7	2	6.9	5	25.5	27.7(4面)	53.2	一部総柱	N45° E	15C後~16C前葉	
	建物12	4.0	2	5.5	3	21.3	0	21.3	側柱	N88° E	15C中~後葉	
	建物13	3.3	2	6.0	2	19.8	0	19.8	側柱	N85° E	15C中~後葉	
	建物14	4.4	2	6.5	3	28.6	0	28.6	総柱	N8° W	15C中~後葉	

表6 中世建物の規模

の東約250mに現存する毘沙門庵（下の大日）は、「毘沙門堂」として「福井」村の中央にあり此の地は法花寺の旧跡也」と記される。つまり建物4・5近辺に「法花寺」が存在した可能性が高く、有力者であった屋敷主の氏寺の役割を担っていたのではないと思われる。

文明2（1470）年の護国寺文書註には、番役が割り当てられた村とその代表者が記載されており、「法花寺村」は「久米殿」とされている。「久米殿」の登場する文書は他にもあり、応永29（1422）年と同31（1424）年の年貢米の引文に「久米四郎右衛門（尉）家守」、長祿2（1458）年の寄進状の連名の中に「久米四郎右衛門入道珍」として登場する。前者は国人として精力的に土地開発に取り組んでいた時期、34年後の後者は「入道珍」と法名で書かれていることから、国人としての地位を後進に譲った晩年ではないかと思われる。建物5は15世紀初頭～前葉と推定されることから、これを国人「久米四郎右衛門（尉）家守」の屋敷と特定して良いのではないかと思われる。建物3は「入道珍」の隠居住まいとしては相応しいかもしれないが、3期以降の建物については①～③の特徴が当てはまるものが無いことから、国人「久米殿」の屋敷は「法花寺村」の他所に移ったと思われる。

第4章の註

1. 『谷町筋遺跡』兵庫県教育委員会 1990
2. 『高萩遺跡』南あわじ市教育委員会 2011
3. 『久保ノカチ遺跡』南あわじ市教育委員会 2012
4. 特に南あわじ市域ではこれまでc1～3が断片的な資料であったことから、c類が取り上げられたことが無かったが、2地区溝357のc1～1～4の一括出土により、その存在が明確になったと言える。
5. 特に洲本市域の寺中遺跡（註18）は手づくねの土師器皿が出土する等、地域差が明らかであることから、比較対象として同列に扱うにはやや問題がある。洲本市域の南遺跡（註23）も同様である。
6. 当該遺跡の出土遺物は1～3期内におさまるが、その前後の状況を知るための参考として0・4期を設定することにした。ただし後述するように0・4期はa～c類で分類不可能なものも存在するため、今後それぞれの時期において再分類と時期の細分を行う必要がある。
7. 法量不明で一覧表には掲載されていないが、後述の叶堂城跡（註16）や、高萩遺跡の溝10からa2（100）と共にb2（102）と思われる細片が出土しており、それらを参考とした。
8. 寺中遺跡土坑4出土c3-1～9を参考とした。註5に述べたようにやや問題がある。
9. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報VI』南あわじ市教育委員会 2013
10. 橋本久和「瓦器塚の編年と年代観」『第28回中世七器研究会 中世考古学と地域・流通』日本中世七器研究会 2009
11. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報III』南あわじ市教育委員会 2010
12. 『新田遺跡』兵庫県教育委員会 1990
13. 高萩遺跡出土c1（31）は全体の法量不明で表4には掲載していない。
14. 高萩遺跡C-1地区建物1柱穴の年代観（14世紀末～15世紀初頭）より古く、久保ノカチ遺跡1～3次5区SK4の年代観（13世紀後半～14世紀中頃）より新しい。
15. 谷町筋遺跡では土坑24を含むV期（15世紀中～後葉）に土師器皿坑頭の形態が均一化すると報告されている。
16. 『叶堂城跡』兵庫県教育委員会 1992、a2（25）、b2（26～28・30）、c2（29）と判断した。
17. SK45からは、V期（20）（15世紀前半～中頃）の他にVI期（19）（15世紀後半～16世紀初頭）の土製煮炊具（註19）も出土しており、時期的にはc3の可能性もあるが、全体に器壁が薄いと器高が高い特徴からc2とした。
18. 『寺中遺跡』兵庫県教育委員会 1989 溝15出土遺物は一部14世紀後半に遡る可能性のある遺物も散見するが、V期の土製煮炊具、東

播系須恵器鉢F類、粟向福年中世3b期（栗岡実「備前焼播鉢の福年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000）の備前焼鉢等、13世紀前半頃が中心と考えられる。

19. 『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004

20. 特に0期の13世紀末～14世紀前半頃の様相が不明である。

21. 小皿2-4については、第2節で述べるように1期の可能性も考えられるが、器壁が極めて薄い特徴がa 2と共通することから2期と判断した。

22. 『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報1』南あわじ市教育委員会 2008

23. 『森遺跡』兵庫県教育委員会 1988

24. 重根弘和「中世の備前焼」『備前焼研究最新録Ⅱ』備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会 2005

25. 船柄俊夫「大坂府南部の瓦質土器生産（2）」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会 1989

26. 調査範囲外へ延長する可能性のある建物は除いた。規模・面積は報告書の図を計測した。時期について、3区SB1柱穴出土13は須a 0もしくはa 1、4区SB3は切り合い関係で4期のSB2より新しいことから4期、5区SB1柱穴出土55・56はa 1と判断した。

27. 建物2出土37はa 2、建物3は遺構18（a 3-1～3、b 3-1・2）の祭祀直後に建てられた可能性が高いことから3期、建物4は流路38出土遺物（小皿2-1・2）とほぼ同時期と推定されることから2期とした。

28. 建物1・4の規模については、報告書の記載に誤りが見られることから報告書の図を計測した。また廂（下屋）部分の床面積も報告書の図を計測した。

29. 中野栄夫編『護国寺誌』護国寺住職 三高堂印 1996

報告書抄録

ふりがな	くぼのちらいせき							
書名	久保ノカチ遺跡Ⅱ							
副書名	経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区第9工区工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	南あわじ市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	山崎裕司							
編集機関	南あわじ市埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代町街1100 ℡0799-42-3849							
発行機関	南あわじ市教育委員会							
所在地	〒656-0393 兵庫県南あわじ市湊90番地1 ℡0799-37-3020							
発行年月日	平成26（2014）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くぼ 久保ノカチ遺跡	ひょうご 兵庫県 みなみ 南あわじ市 かしのう 賀集 福井	2895156	970074	34度 15分 27秒	134度 45分 10秒	平成19（2007） 年7月31日～ 11月6日	1,496㎡	経営体育成基盤 整備事業（大日川 東Ⅱ期地区第9 工区工事）に伴う
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
くぼ 久保ノカチ遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物 土坑・溝	土師器・須恵器 陶磁器・瓦器 鉄製品・石製品				

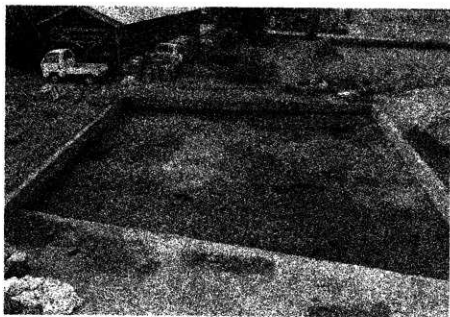
調査地近景（東より）



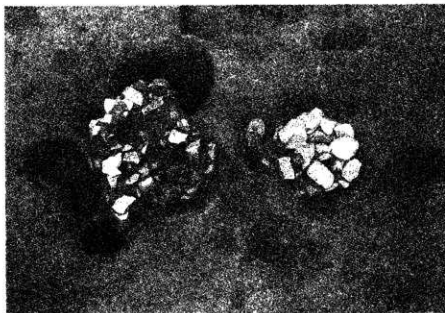
調査地近景（南より）



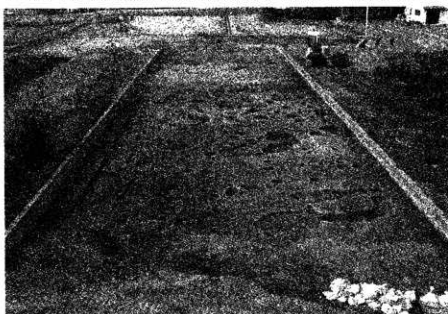
1地区全景（北より）



写真図版 2



2地区 土坑 70・71
遺物出土状況 (南より)



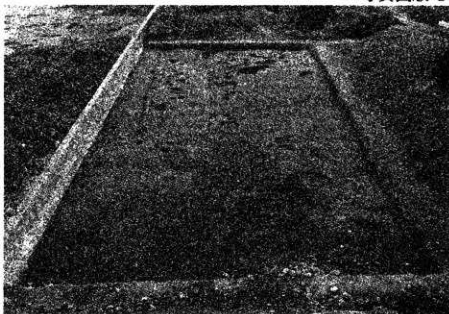
2地区拡張前全景 (南より)



2地区東拡張部 (北より)

Copyright © 2011 by National Institute of Advanced Industrial Science and Technology. All rights reserved.

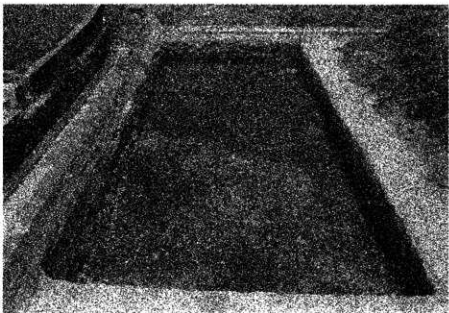
2地区西拡張部（北より）



2地区 建物4（南東より）

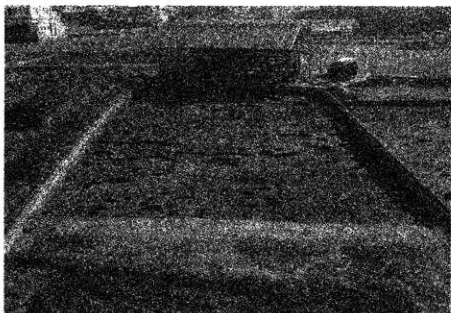


3地区全景（南東より）



Copyright © 2010 by National Institute of Advanced Industrial Science and Technology. All rights reserved.

写真図版 4



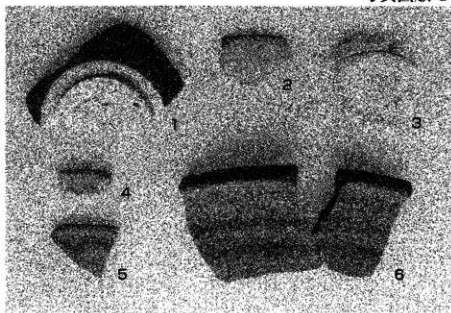
4地区東部（北より）



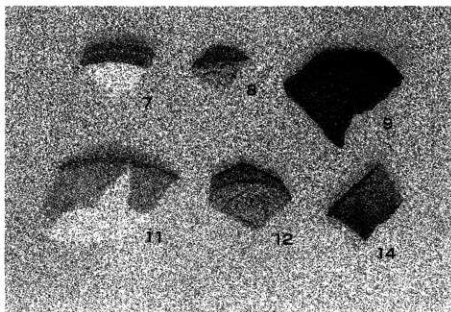
4地区西部（西より）



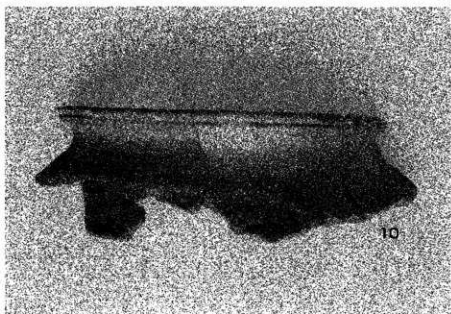
4地区 建物1（西より）



1地区 包含層・
2地区 遺構出土土器

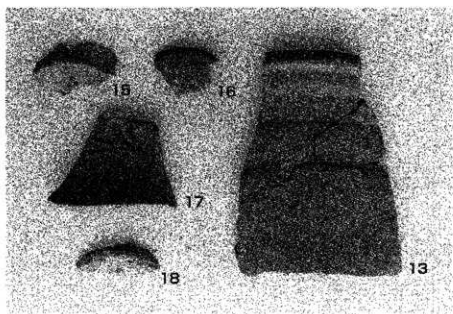


2地区 遺構出土土器

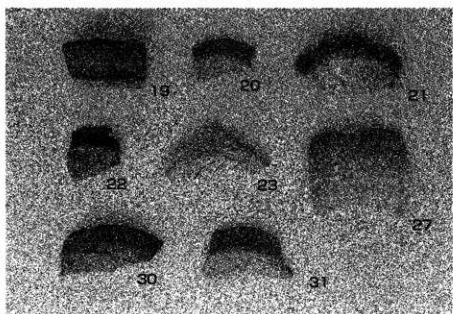


2地区 遺構出土土器

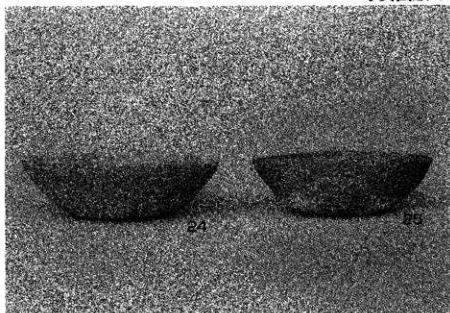
写真図版 6



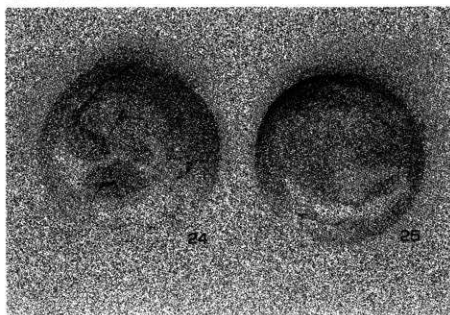
2地区 遺構出土土器



2地区 遺構出土土器

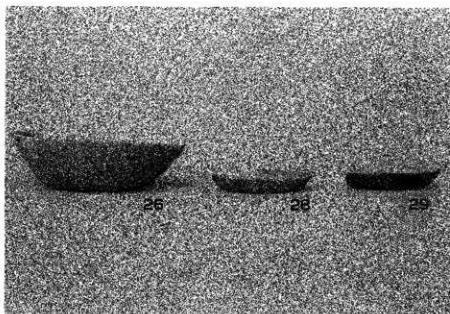


2地区 遺構出土土器

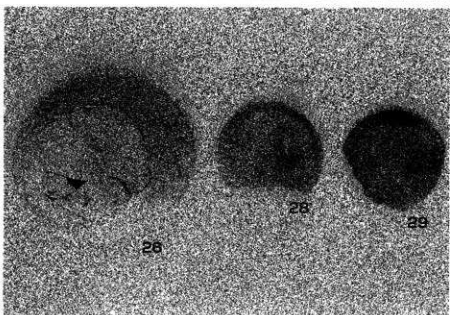


2地区 遺構出土土器

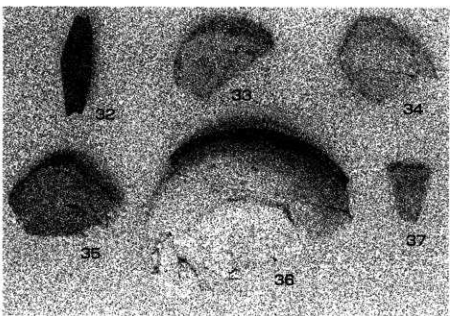
写真図版 8



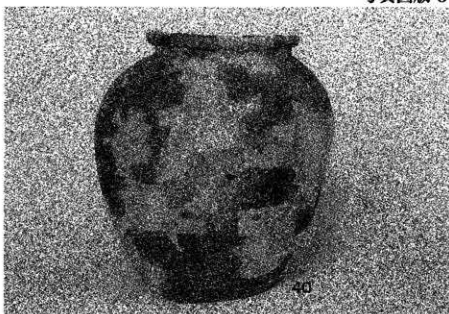
2地区 遺構出土土器



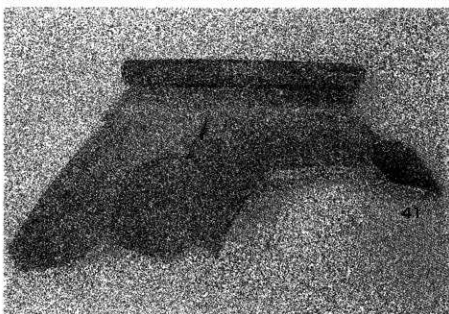
2地区 遺構出土土器



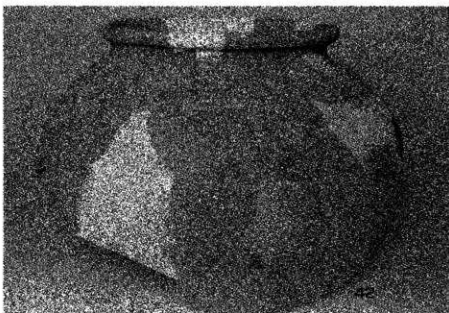
2地区 遺構出土土器



2地区 遺構出土土器

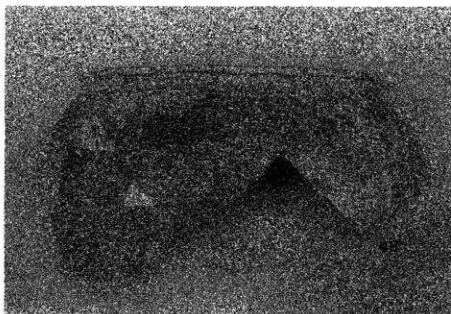


2地区 遺構出土土器

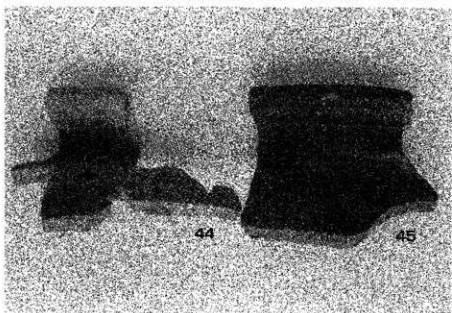


2地区 遺構出土土器

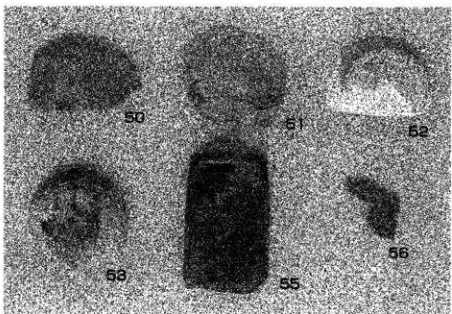
写真図版 10



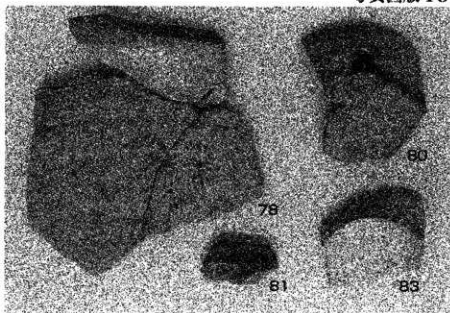
2地区 遺構出土土器



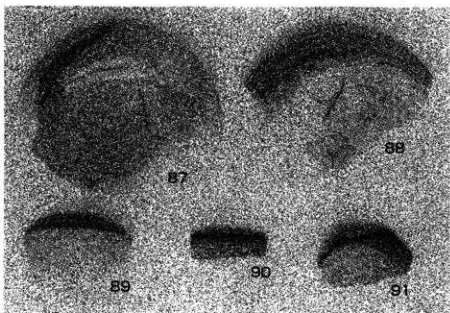
2地区 遺構出土土器



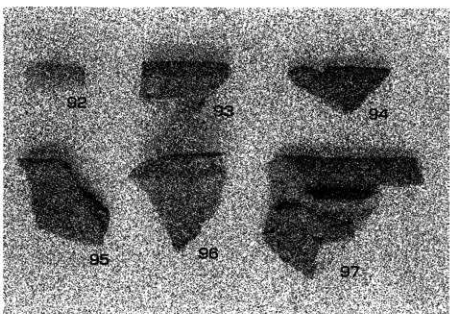
2地区 遺構出土土器・
石製品



2地区 遺構出土土器

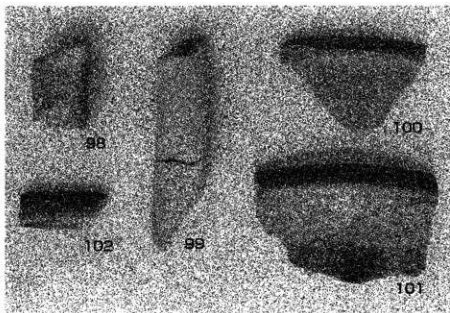


2地区 包含層出土土器

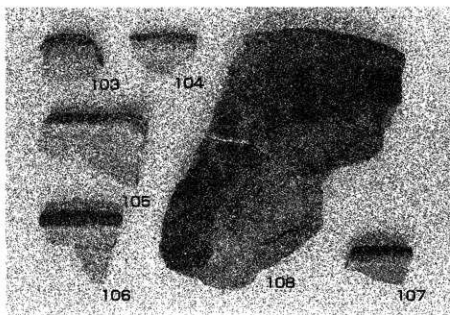


2地区 包含層出土土器

写真図版 14

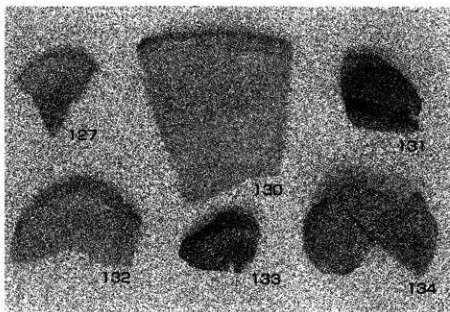


2地区 包含層出土土器

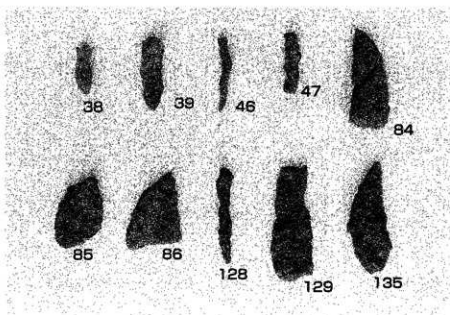


2地区 包含層出土土器

写真図版 16



4地区 遺構・包含層
出土土器



2-4地区 遺構・包含層
出土鉄製品

2014年3月31日発行

久保ノカチ遺跡Ⅱ

経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区第9工区工事）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100

TEL 0799-42-3849

印刷 佐藤印刷

〒656-0501 兵庫県南あわじ市福良甲1006-4

TEL 0799-52-0049